

望致參候、一天氣よし、一御はい鷹三ツ・はやふさ貳ッ餌飼致候へと、拙者之被預置候、
同十六日、^(十月)一うなかみ参候はやふさ、翌日指上候へと、^(戸村)十大夫殿、拙者ニ被仰付候間、
十大夫殿書狀指添遣申候、一昨日次兵へ殿御返事遣候御飛脚、栗橋にて狀差上罷歸候、其
便ニ、爰元之被殘置候御はい鷹貳ッ、あわいあしき由申上候へり、御藥被遣候、一くみ湯塩
原へ明日三番目之者遣候はつこ候へ共、今日爲參由、御走衆源丞申之付、指越申候、壹夜り自
分の賄也、^(中)一天氣よし、

十月十八日、^(中)一去二日之日付にて、^(梅津書也)半右衛門所の書狀有、様子り、山歸太鷹三ッ差上候
由、御鷹匠衆かや橋へ參候由、長三郎所の相届候、此便り十大夫殿へ御はい鷹、かや橋の被進
候、御小人之者持參候、一天氣よし、

同十九日、^(中)一昨日十大夫殿へ被進候御鷹持參候者罷歸ニ、爰元御鷹之様子、傳五所迄
申上候、一天氣よし、一鹿沼右衛門殿會津の、有自用御越之由、書狀・音信物、會津手繩三
十筋給候、

十月廿日、一かや橋の次兵衛殿、^(島田重次)以柏へ御鷹之鷹壹ッ宛被遣候、今朝曉參着、信太兵部持參
候へり、以柏殊外之御腹立之由、御機合爲御養生御出、御鷹御遣候へり、兼而之御りち儀無ニ

會津手繩

島田重次義
宣ノ湯治中
放鷹ハ平素
ノ律義無ニ
ナルト怒ル

鮭ノ鹽引
子籠すじこ

罷成候由、兵部少之被仰理候由、其段兵部少所の申上候、以柏も御狀有、一天氣よし、

^(附箋)御病中ニ御鷹御遣候事

同廿一日、^(中)一鹿沼右衛門殿へ爲見舞熊皮あをり二掛持參致候、一去五日ノ日付之
て、秋田の半右衛門書狀有、様子り、御走衆之鮭ノ塩引・同子籠すじこ差上候、此御走衆かや橋
にて、其書狀、彌五郎を以、御披見之入候由、御用之儀り、去月廿一日之被仰遣候通畏承之由、
一天氣よし、

十月廿三日、一くすの御はい鷹の煩、かや橋へ申上候、信兵有御用遣候飛脚の便也、一御
鷹師舍人秋田へ罷下候由、さかへ取こかやはしを被參候間、拙者の所へ方々の書狀給候、返
事致候、又半右衛門、我等宿へも書中越申候、^(寶鐘)法鐘院へ爲御返事、并追而之狀返進、此便也、
^(久保田城下地形)

^(中)一天氣吉、
同廿四日、一土屋忠二郎殿、^(利清)赤見惣右衛門殿へ御見舞之參候、何も懸御目之候、惣右衛門殿
にて御振舞有、一かや橋の明日御歸之由候て、御飛脚參候、又平野主税昨日罷出候由被申
候て、戌ノ刻參着、御鷹共九ッ參候、又次兵へ殿の兵部少へ御内存り、二七日も三七日も御湯
治被成、御湯相當申候て、御機嫌よく候て、太炊殿・我等方へ御狀可被下候、左候て、大炊殿談

町奉行島田
利正義宣快
氣ニ依り放
鷹ノ暇ヲ給
セラル、ヤ
ウ幹旋ス

義宣物ヲ土
井利勝及ビ
重次ニ贈ル

節物買

義宣若大鷹
ヲ秀忠ニ獻
ズ
秀忠内二羽
ヲ義宣ニ與
フ
義宣ニ放鷹
ノ暇ヲ給ス
義宣家光及
ビ忠長ニ鷹
ヲ進ム

合申、御鷹野御いとま申候て可進候、直之御鷹野可被成候、重而御暇ハ被成間敷由被仰候通、
兵部少申上之付、(藤川、下總孫島郡)もろ川ハ昨日御歸被成候由、御飛脚夜半之有、一天氣よし、
十月廿六日、一平塚強左衛門爲御使、かや橋ハ被參候、様子ハ、御入湯御相當申候御禮、太
炊殿・次兵衛殿へ御狀有、御國本の鮭ノ塩引甘本ツ、鮭ノすし二桶ツ、被進候、以柏へ鮭ノ
鮪二桶被進候、第一ハすく之御鷹野被成置度御暇被下候様ニ、次兵衛殿・大炊殿御馳走頼入
由、兵部少所へ被仰遣候、一天氣よし、一せち物買之町へ罷出候、

十月廿七日、一窪田ハ御鷹共罷上之付、半右衛門書狀指越候、かや橋之て御披見ニ入候由、
長三郎添狀有、御鷹ハ若太鷹九ツ江戸迄參着、一ひる天氣よし、夜雨ふる、

同廿八日、一御城へ若太鷹八ツ御進上被成候へハ、六ツ被留置、二ツハ御拜領ニ候、其御次
手之御鷹野之御暇被進候由、次兵へ殿御物語之様子、信兵被申候、就之御走薄井角兵へ夜通
ニ馬にて遣申上候、此便之御服之御用ニ京都へ人を被遣可然かと、森田傳五所迄申上候、
一朝雨ふる、四時ハ天氣よし、

十月廿九日、一大炊殿ハ御返事罷出候之付、平塚強左衛門御渡野へ被罷歸候、(家光)一大納言
様・宰相様への御鷹納候、一森田傳五所ハ御内書有、様子ハ、歳暮之御服之御用ニ川井理左

千本義定

南光坊天海

紗綾
亀綾
羽二重

秀忠義宣ニ
放鷹ヲ許ス

衛門申付爲上可申由御書付有、銀ハ御藏ハ取出し、入候ほど積候て、指越申候へと被仰下候、

一御下風呂如定立、一天氣よし、

霜月朔日、(天)一千本太和殿(義定)いまた不被爲合候由承候て、使者、書狀并御小袖壹重給候、信兵を

以、茂木筑後殿御身上之儀、御内々有、我等存様子内々申通し申候、屋形様へ御湯治之付、葛
壹箱、書狀被進候、請取申候、一かや橋ハ昨廿九日ノ日付之て、森田傳五御内書有、様子ハ、

(天海)南光僧正様日光ハ爰元へ御歸候ハ、爲御使拙者罷越、先立御鷹三ツ被進候御禮可申上由、
又御筋氣故在郷へ御出之由可申上由被仰下候、夜ニ入參候間、參上不申候、又今日ノ日付之
て、傳五所ハ御内書有、様子ハ、さや・かめや・はふたいなどにて、坊主さる物をしたてさせ、
(下總結城郡)石毛へ指上可申由、即高根織部之御書付見せ申候て申渡候、又碩庵・彦二郎殿御供致罷上候

間、六月ハ只今迄六ヶ月之候間、下シ可申由、又次兵へ殿・大炊殿へ、御渡野ハの爲御使、拙者
參、書狀可指上由、御口上ハ、御鷹御上候處ニ、御披露被成被下忝候、其上御鷹二ツ拜領、尙以
直ニ鷹野を仕候へと被仰下候事、從何以過分忝仕合、御取合故と可申上由、又爰元ニ被指置
候山歸太鷹御はい鷹、三日ニ壹度ツ、水鳥屋へはなし候やうニ可申理由、即御書付見せ申
候、一天氣よし、

今大路親清
義宣ニ一旦
江戸ニ歸リ
然ル後放鷹
ニ出ヅベキ
コトヲ勸告
ス

本多正純ノ
斡旋

元和七年十月十二日

三七四

霜月二日、一昨日被仰遣候間、御渡野（由直瀬）參候由申候て、次兵へ殿、太炊殿へ參候へ共、延壽院へ御出候て不懸御目候、朝會之由、太炊殿・仁兵へ（延壽院）も相不申候間、兩度迄參候へ共相不申候、何も御狀預置罷歸候、一昨日御内書之御返事、今朝傳五所迄申上候、（今大路親清）一道三法印の道琢を以被仰遣分の、屋形様入湯御暇にて、御知行へ御出被成、直之御鷹野御暇にて御座候由、不可然候、早々御歸被成、入湯相當之御披露、御鷹御拜領の御禮被成置可然由、兩人ニ申遣候へと、信太兵部拙者之被仰付候、其段戊ノ刻飛脚遣申候、一天氣吉、霜月三日、一嶋田次兵へ殿被仰遣分の、屋形様御鷹御拜領、御鷹野御暇之時、（本多正純）上野殿も御座被成、御取合ニ候間、御狀我等ニ持參候様こと被仰遣候間、參候て、太村田兵衛を頼候て罷歸候、（酒井忠世）雅樂頭様御眼病氣之由候て無御出候へ共、參候て其段可申由被仰遣候間、御狀を指置、口上計にて申上候へ、御懇切之御返事有、信兵同前、（義宣母、伊豫氏）一御袋様へ大炊殿を驚被進候之付、（貞村）十大夫殿・彦大夫・源兵へ・兵部・碩庵・我等式も被召寄、御振舞被下候、一天氣よし、霜月四日、一道三法印の御内意之通、兵部少・我等御鷹野へ申上候へ、御心得之由候て、（下野芳賀郡）石下栗橋迄今日御座被成、明日の爰元へ御着可有由被仰遣候、一道三法印も彌々御歸候て可然由、今朝も道琢を以被仰遣候、一朝の晩迄雨ふる、

義宣江戸ニ
歸ル

同五日、一かや橋の、屋形様御歸被成候、栗橋の御着之由、一天氣よし、

〔天英公御書寫〕下

十月五日之日付之而書中、於萱橋披見候、塩原の湯を汲寄候、萱橋之而入可申由申上、御暇之而、十五日之江戸を立、萱橋に來候、湯に入候得者、筋氣に能候得共、少寸白之あたり候、乍去七日程も入て見候へく候、（此下御鷹之事也、故ニ畧之）

私云、元和七年ナリ、
十月廿日

御名乗御居判

〔參考〕

〔醫學天正記〕坤 諸瘡

一 佐竹義宣、左脇下赤腫、不疼不痒、榮衛反魂湯加忍一倍、何首斤通赤芍、（芍、）止荷、炒烏朮、炒、奴、（若惡心スルニハ、姜汁ニテ炒、甘、各等、水酒半煎、若流注セハ、加獨、此方鑑、瘡門有、）

十四日、（壬）秀忠、口切茶會ヲ催シ、出羽米澤城主上杉景勝・陸奥仙臺城主伊達政宗・出羽久保田城主佐竹義宣及ビ日野唯心（輝）ヲ饗ス、

〔梅津政景日記〕十

同十三日、一明日、公方様御口切、御登城候へと、御年寄衆の御ふれ狀有、御相客景勝様・政宗様・日野用心様、為御禮即御城へ御出被成候、御供致候、一取上

元和七年十月十四日

三七五

義宣登城シ
テ招請ヲ謝
ス

最上義俊ノ
招請ヲ謝辭
ス

元和七年十月十五日 二十日

三七六

(義俊)源五郎殿へ、來ル十六日御數寄可有由兼而御約束御申候へ共、御城御數寄相極候て、明後か
や橋へ御出可有由候て、被仰分之御使ニ參候、淺場下總を以申上、御返事申請、御見舞致罷歸
候、一天氣よし、

十月十四日、一公方様にて御數寄、御登城被成候、御相客景勝様・政宗様・日野用心様御四
人也、○中一天氣よし、

〔寛政重修諸家譜〕百二 佐竹義宣 右京大夫 七年十月十四日、上杉景勝・伊達政宗・日野唯

心と共に、口切の點茶をたまふ、

十五日、癸未尾張名古屋城主徳川義直、鶴ヲ女御徳川和子ニ獻ズ、

〔別敬公實錄〕二 十五日、獻鶴於女御、(徳川和子)是後獻女御者相繼不復具載、

○義直、和子ニ鶴ヲ獻ズルコト、詳ナラズ、姑ク本書ニ據リテ、茲ニ掲グ、

二十日、戊子陸奥弘前城主津輕信枚、人數改ヲ爲サントシ、柏木館野ニ狼狩ヲ
行フ、

〔津輕信枚公御代日記〕 一同七辛酉年 (元和)

一十月中旬のころ、信枚公三十七歳の御時、御國中の人數御改め遊されへく旨思召に付、幸

津輕信枚ノ
人數改

柏木館野狼
狩
十五歳以上
ノ男子ニ出
頭ヲ命ズ
人數八千人

(陸奥津輕郡)柏木館野にて狼出、あれ申候に付、則柏木館のにおゐて、狼狩と被仰出、來ル廿八日柏木館

野を御卷なされへくよし被仰渡、年十五歳以上の男子罷出可申旨、在々へ御觸御坐候て、
則着到に記され御覽候へ、八千人の着到にて御坐候よし、頓て十月廿日一説廿八日にもあり、に、

柏木館野を御卷せ被遊候、人數二手に分けて、其日、西のかた一手の勢子の大將(信枚)の兼平出
雲、小頭衆のあまた被仰付候、西の桔梗長根海道(マ、下同シ)一間に三人ツ、立可申候よし仰付られ

候、南の中通り海道、中ほとまて廻り可申よしにて、東の方一手の勢子大將の乳井日向に
仰付られ、小頭衆誰かれ數多にて、家中の諸士を加へ、各勢子を引具し、大和澤海道をま
り、柏木館野中通りにて出雲と出合候へ、貝をふかせ可申よし被仰渡遣され候、尤是の
桔梗長根より、大和澤海道へおし廻すつもりなり、

信枚公は、白石野の清水に御馬を御立なされ候、御本陣の典厩館になされ候て、この前
の平へ獸を追いたし可申旨御意被遊候、その朝俄に雪ふり、深さ三尺ほど降りつもり申
候、大方町家一軒より五人・三人はかりつゝ、いつれも見物かてらに罷出申候、左候ゆへ
に、柏木館の廻り一里半ほど可有之よしに付て、一間に三人定被仰付候に、其ことく御積
り通にて御坐候て被爲狩候處、その日の得もの狼四ツ、狐・兎の類少しばかり御坐候、是

獲物

元和七年十月二十日

三七七

飢饉後人數
改 土手堤普請
ハ家次ニ課
ス

元和七年十月二十日

三七八

ハ、飢饉過後の後、人數を御集め御覽可被遊はかりに被仰付候事のよしに御坐候、其前廉に土手堤御普請の節などの人足ハ、在郷の家次に被仰付候へとも、罷出不申ものも數多御坐候へとも、御普請の丁場千葉喜右衛門に被仰付候て、人足相改候處、一万人の人足にて候と相知れ申候、右御普請の内兩度茂森の山にて、右一万の人足へ酒御振舞なされ候、何れも醉候ほと給せ可申由に被仰付被下置候間、其節弘前中爰かしくにも、酒に醉たをれ申候もの數多御坐候よし、何れも、御町の老人とも多く存罷在候、尤これは山階陣の時に分に御坐候、

〔津輕舊記〕

四

(元和七年)

(津輕信枚)

十月廿八日、公於柏木館野狼狩あり、惣人數二手に相分、西の方大將兼平

出雲信秋、東の方大將乳井日向、其外小頭誰彼數多被仰付、兼平手は桔梗長根の道筋、一間に三人並に相立、乳井手は大和澤道を押廻し、兩手出合次第貝を吹合へき旨定めらる、公には、白石野大清水に御馬を立られ、典厩館を御本陣に御定め、則朝雪三尺計降積候か、町中の家壹軒ハ五三人宛、何れも見物かてらに罷出候様被仰付、罷出候、依て柏木立野廻り一里半程有之に付、一間に三人ツ、相立候様被仰付候處、御積りの通りに候、則日狼并狐・兎の類御得物あり、右御狩之儀は、飢饉後人數御集め御覽可被遊思召にて、折節柏木館野にて狼多く荒

家一軒ヨリ
五三人宛見
物ニ出デシム

出に付、則狼狩と被仰出候、今年公御齡三十七歳なり、此人數都合八千人といふ、工藤家記

〔津輕一統志〕

四 信枚公

二十五

同

七辛酉年

元和

十月、於柏木館野狼荒ニ付、爲可被狩、十五歳以上

可出立旨、在々へ御觸有、則八千ノ著到ニテ、十月二十日、人數二手ニ分レ出立、東ノ方勢子大將ハ兼平出雲信秋ニ、家中ノ諸士ヲ加へ、勢子ヲ進退シ、桔梗長根ノ海道、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百一間ニ三人宛並、西ハ中通リ海道ノ中程迄、又東ノ方勢子大將乳井日向、家中ノ諸士ヲ加へ、各勢子ヲ引具シ、大和澤海道ヲ押廻シ、兼平カ手ト出合次第、貝可吹合ト定ラル、太守ハ白石野大清水ニ御馬ヲ立ラル、典厩館ヲ御本陣ニ御定、平ハ獸ヲ追出シ可申旨、此日朝雪三尺積ル、町中ヨリ見物ニ出ル者共、柏木館總廻一里半程可有之門、一間ニ三人宛立並ル様ニト御定アリシニ、如賢慮不相違、此狩ハ、飢饉後人數ヲ御改獲物狼四ツ、其狐・兎之類有之、
○信枚、柏木館野ニ狼狩ヲ催スコト、未ダ詳ナラズ、十一月六日江戸ニ在ルコト、梅津政景日記ニ見ユ、津輕信枚公御代日記以下、年月等誤アランモ、姑ク茲ニ掲グ、

二十一日、丑、巳女御德川和子、能ヲ禁中ニ獻ジ、公家衆門跡等ヲ饗ス、

〔資勝卿記〕

一

十月十九日

丁亥

朝時雨

申候也、

やかて晴

風吹也、

午刻以後

モ度々時雨

夜ニ入時雨候也、○中來廿一日、女御様御申沙汰ノ御能有之由候間、昨夕タテ間中ノ折ヲア

間中ノ折

元和七年十月二十一日

三七九

ツラへ之遣、今朝出來て來申候、清十郎ヤトイ、エヲカ、セ申候也、夜之入晝出申候也、午刻過之長橋殿御局ヨリ、明後日女御様御申沙汰之御能候間伺公可仕由御觸也、外様衆五十二人有之、○下略、玄猪ノ御儀ノコトニ、カ、ル本月七日ノ條ニ收ム、

廿日、戊子、晴、今日終日折用意候へとも、出來不申候也、外スナコ銀、大キリハク金、菊葵ノ丸ヲ晝カク也、マン・鮑貝モリ・ヤウカン・コンキリ・フ・コンニヤク・丸鮑ノ小サシ也、○下略、柳川野資勝ニ贈ルコトニカ、ル、六月二十三日ノ條ニ收ム、

廿一日、己丑、晴、晚少時雨候也、○中略、日野資勝、柳川調興ノ書ニ答フル、女御様へ折御樽二ツ、今朝進上仕候也、日出以前之御能之伺公申候也、御酒、攝家・門跡衆へ進候、肝煎之衆也、予、中御門大納言・烏丸大納言・廣橋大納言父子・中納言・平宰相父子・柳原等也、晝饅頭ニテ御酒有、晚之御振舞、御攝家衆、御門跡衆之膳有、惣間公家、汁、午房之鴨入、中ヒツ鱈、左之カウノ物、桶之鮭ノハラ、右之タコ・鮭燒物、

御能組ハ式三番、センサイ久藏、サンハサウ京介、次左衛門、トウトリ左近右衛門、トウワキ彦兵へ、

玉井、（兼右）伊守、ツレ天女、天女、ワキ久六、ツレ久右衛門、ツレ五郎兵へ、同又三郎、

能組

大夫澁谷紀伊守

大、又五郎、小、左近右衛門、ワキ笛、九右衛門、ツレ太、宇右衛門、

實盛、因幡守、ワキ權右衛門、ツレ清六、同喜兵衛、

大、角大夫、小、六兵へ、ワキ笛、勘七、ツレ太、忠兵へ、

千手、紀伊守、ワキ重衡、五兵衛、ツレ仁兵衛、

大、植田、小、與右衛門、ワキ笛、丹後、

谷行、與吉郎、子長福、ツレ五兵衛、ワキ權右衛門、ツレ宇右衛門、ワキ又藏、ツレ大、長次郎、ワキ小、彦兵衛、

（大カ）喜兵衛少五郎、ワキ笛、惣兵衛、

天鼓、同又三郎、ワキ大、又作、ツレ小、六兵衛、ワキ笛、勘七、

三井寺、因幡守、子長福、ワキ長兵衛、ツレ大、善兵衛、ワキ小、庄兵衛、ツレ笛、太郎兵衛、

國栖、紀伊守、ツレ德十郎、ワキ五兵衛、ツレ天女、與吉、ワキ庄兵衛、ツレ少五郎、又藏、ワキ大、左七郎、ツレ小、與右衛

門、ワキ笛、太郎兵へ、ツレ太、四郎兵へ、

藤永、（兼）同、子岩松、宿少五郎、ワキ久右衛門、ナルヲ五兵へ、ツレ宇右衛門、同喜兵へ、

大、惣左衛門、ワキ小、庄兵衛、ツレ笛、太郎兵衛、ワキ太、小左衛門、

融、因幡守、ワキ五郎兵衛、ツレ大、植田、ワキ小、左近衛門、ツレ笛、牛尾、ワキ太、忠兵衛、

元和七年十月二十一日

三八二

芝居ニ幕ヲ
引廻ス

ハトンスノマク也、

舟橋、與五郎、^{ワキ}五兵衛、^{ワキ}清六、^{ツレ}又藏、^{大善兵衛}小、^{與右衛門}太忠兵へ、
鶉飼、紀伊守、^{ワキ}宇右衛門、^{ツレ}又藏、^{大又作}小庄兵へ、^{太四郎兵}太四郎兵へ、
吳羽、與吉郎、^{ワキ}喜兵へ、^{ワキ}太半二郎、^{ワキ}小次左衛門、^{ワキ}笛惣兵へ、^{ワキ}太甚太郎、

〔御能、シ、ハイノメクリニ、マク串ヲウチ、白地ニ黒葵ノ丸ノマクヲ、西方ハ皆引マハス、東

強飯

脇能

廿二日、庚子、晴、辰刻ニ御能ハシマリ申候也、先大夫父子罷出謠申候、後兩人ニ御扇拜領、西
三條、其後紀伊守ハ謠申、ハヤシ有、因幡守ハスクニカクヤニ入申候、大夫カクヤハ入候て
後、又五兵衛謠ハヤシ有、先舞臺へ不出以前ニ、諸大夫ノ間にて、板倉周防守奉行にて、大夫、
何も役者、女御様ヨリ御小袖共拜領由承候也、兩日なから、板倉防州ハ日花門ノ下伺公申候
也、晝コハ飯ニテ御酒有、御後ニテモ、又七度マテ御酒有、

金札、^{ワキ能}因幡守、^{ワキ}仁兵へ、^{ツレ}少五郎、^同又藏、^{大角兵へ}小、^{大六兵へ}太四郎兵衛、
通盛、與吉郎、^{ツレ}五兵衛、^{ワキ}庄兵衛、^{ツレ}少五郎、^{大左七郎}小次左衛門、^{大九兵衛}太忠次郎、
遊行柳、紀伊守、^{ワキ}權右衛門、^{ツレ}清六、^同庄兵衛、^{大善兵衛}小、^{大左近右衛門}太小左衛門、^{大長次郎}太忠兵衛、
壇風、與吉郎、^子長福、^{ワキ}久右衛門、^{本間}權右衛門、^{舟サシ}仁兵衛、^{大長次郎}太忠兵衛、

天酌六位マ
デ

富士太鼓、因幡守、

鞍馬天狗、紀伊守、

うとふ、因幡守、

綱、與吉郎、

海士、紀伊守、

女郎花、與吉郎、

鶴、同、

老松、因幡守、

御能過て、天酌ニテ、御トヲリ有、五度入ニテ三盃、至六位有之、座席ノ様子ハ、^左端座、^{九條忠盛}關白殿以
下御攝家宮、末下藹、^{兼勝}廣橋前内府、右座與、^{兼深親王}仁和寺御門跡以下下藹、^{寛徳}勸修寺門跡也、御盃了テ入
御之後、各退出候也、

〔時慶卿記〕

四十

九月十一日、天晴陰、時雨、○中一御能廿一日頃ニ可在之ト風聞、

〔時慶卿記〕

五十

十月廿日、天晴陰、○中一女御殿へ生鯛大ル五進上、但於禁中、^{勢多}瀬田ノ

〔治體〕
豊前請取テ、付帳由候、弓氣多へモ遣狀、其由申候、

元和七年十月二十一日

三八三

元和七年十月二十一日

三八四

廿一日、天晴、暖氣、一禁中御能、女御殿御申沙汰也、早朝出仕、平松(時興)ハ紫宸殿ノ奉行ニテ昨日ヨリ相詰、御能十二番也、澁谷紀伊守(天)太夫也、子二人、因幡、仕候、役者脇、進藤ヲ始京中堪能ノ者共也、能ノ間、攝家親王・門跡達各へ御酒申入、役者ニ中御門大・日野父子(宗勝・光盛)・烏丸大・清閑寺(其房)・廣大(兼賢)・同宰相・予父子等也、獻奉行・振舞奉行等各別ニ在之、御能初ノ前ノ獻ヨリ入御、後ニハ無出御、一陽明(正衛信等)ハ眩暈心トテ御酒不進、各へ強テ御酒申入、板周防ニ會候、珍重申候、一於虎間振舞、奉行ハ万入・藤右衛門佐等也、御陪膳ノ衆別ニ記之、

後朝御能
近衛信尋不
參

入後ノ後公
家衆ノ謠跳
舞アリ

廿二日、天晴、前宵ハ雨也、晚ハ風寒、後朝御能十二番、入夜三番アリ、陽明ハ爲御養生無御參、○中和門院、香蓮院、尊純ヲシテ、近衛信尋ノ病氣平癒ヲ祈ラシメ給フコト、十一月二十四日ノ條ニ見ユ、一板周防へ對顔候、御能ノ後御獻、予謠發聲可申由、兩傳被申候、兩三聲予發、天抄六位迄被成候、多人數也、今日モ、如昨御酒ノ挨拶申入、一入御後於紫宸殿、各謠・跳・舞等、前内府御酒張行也、
廿三日、天晴、一昨日御禮ニ禁中へ參、長橋迄申入、又太乳母人へも申候、女御殿へモ申入、一陽明へ見舞申候、暫伺候候、

獻奉行

〔土御門泰重卿記〕

四

十月十八日、丙戌、晴、○中略御能御觸有之也、

廿一日、己丑、晴、外様内々不殘伺公、日出時分御能始也、攝家宮門跡不殘御參候、御室御所も(仁和寺覺深親王)

初日十三番

紫宸殿取置

紫宸殿庭上
ニテ猿樂ア
リ

禁中猿樂ノ
風聞

御成候、若殿上人不殘陪膳也、予清閑寺竹屋三人獻奉行也、御振舞御肝入衆ハ正親町三條(實有)・万里小路・白川二位(雅朝)・右衛門佐・高倉等之衆也、御菓子時々、御酒・茶等時々進上之、肝入衆中御門中納言・同大納言・中院(通村)・四辻(季殿)・阿野等也、惣見繕衆阿野・中御門中納言・中院・四辻・万里小路等也、大形如此、紫宸殿書付張付有之也、初日十三番御能有之也、天氣よく、珍重千万也、
廿二日、雨天、雖然頓而晴也、庚子、今度之御能女御御申沙汰也、御能役者小袖一重ツ、遣候、御能始如昨日、各御伺公也、今日天酌有之、四ツ時分相濟申候、

〔孝亮宿禰日次記〕

六

十月十九日、丁亥、晴、入夜雨下、南殿御取置之事有催、仰使部令觸史生・官掌・召使等、○中略、御玄猪ノコトニカカル、本月七日ノ條ニ收ム、廿一日、忠利可祇候由有御催、

女御の御かたより御のふ御入候まゝ、廿一日よりみなく御しこう候へのよし申給候、
奥ニ人々被書連、極聽ノ下ニ加奉、返進了、

廿一日、己丑、晴、於紫宸殿庭上有猿樂、女御御申沙汰也、諸家祇候、忠利參之、
廿二日、庚寅、小雨陰晴、禁中後朝御能、忠利參、

廿三日、辛卯、晴、南殿御取置之事、清閑寺中納言被催也、仰使部令觸其人々、

〔義演准后日記〕

二十

十月十五日、女院御所餅兩籠進上、禁中御能、來廿一日云々、未無(中和門院近衛前子)

元和七年十月二十一日

三八五

醍醐寺三寶院義演出京ス

同覺定加行中ナルヲ以テ參内セズ

御座敷ノ次第

善盡シ美盡ス

出御

相國寺慈照院所叔顯牌

元和七年十月二十二日

御觸、○下略

十八日、從傳奏廣橋前内府來廿一日、女御ヨリ御申沙汰御能御座、可有御參内由觸來畢、重而觸、寂前申落云々、(兼定)新門主同可有御參内、仍御樽用意俄仰付人、出洛、

廿日、出京、御樽三荷、大折進上、新門尤參内可申事也、雖然加行ニ候間、非自由通御理申入畢、

廿一日、辰初刻參内、既御能始了、初獻攝家中、親王、仍俗衆計御相伴也、第二獻ヨリ御室始テ

御前ニ參御相伴也、前々如此、法中、御祝儀ノ間初獻ヲハ、御陰ニテ被下之、御能十二番、入夜

二番在之、籌也、御座敷次第ノ事、南方第一九條關白、近衛左府、一條右府、鷹司大閣、二條内府、

鷹司孫大納言、九條御方大納言也、東方第一八條宮、伏見宮、御室、竹内宮、妙法院宮、八宮、梶井

二品親王、次子、次青蓮院大僧正、隨心院、勸修寺、廣橋前内府、着座次第如此、御盃天盃殿下拜

領、次八條宮以下如常、終日數獻被下、盡善盡美、

廿二日、後朝御能於女御、大夫其外不殘小袖云々、巳刻、未刻能始、今日十一番也、一獻如昨日、

亥刻御能畢、後出御、一獻御相伴被下、不殘天酌ニテ被下、及夜半歸宿坊、以外草卧了、

〔鹿苑日錄〕五十 十月廿一日、赴禁裡御能、

二十二日、庚寅幕府、金地院崇傳以ヲシテ、江戸城西丸裏門立柱ノ吉日ヲ勘申

酒井忠勝

セシム、

〔本光國師日記〕三十 一十月廿二日、酒井讚岐殿ヨリ捻來、西丸裏の御門柱立之吉日

之儀申來、則返書、又別番之引合一重之認遣ス、案在左、

御門御柱立之吉日十月廿七日乙未、危金、右大明日、白虎脇日、十一月之節之入故、用之先

例、以上、十月吉日考之、

二十七日、乙未權大納言日野資勝ヲシテ、後柏原天皇ノ御製ヲ書寫セシメ給フ、

〔資勝卿記〕一 十月廿七日、乙未、晴、夜之入少時雨申候也、○中略、近江多賀社不動院ノ

年未雜載佛寺ノ條ニ收ム、中納言ヨリ、後柏原院ノ御製、禁裏ヨリ仰之由候て寫來候間、則書寫遣申候也、

略○下

中和門院、御宴ヲ獻ゼラル、

〔土御門泰重卿記〕四 十月廿六日、甲午、晴天、○中略、中院通村ノ源氏物語進講ノ明日

依女院御所御銚子御上候由御觸有之也、畏之由申上候、

廿七日、乙未、晴、午下刻伺公仕候、竹門、近衛殿、三宮、曇華院殿、青門、中御門大納言父子、四辻

兄弟、阿野兄弟、中院、右衛門佐、園、予、姉少路、白川、正親町三條、以上十三人御觸之衆也、御池

元和七年十月二十七日

公家衆門跡等祇候ス

元和七年十月是月

三八八

御茶湯

之山ニ、鞍馬之ふごをろしの躰をまねひ、種々珍重事共有之也、阿野中納言・中御門中納言被仰付候、ふごより種々御肴とも、上よりくれなひ二筋・かんさけ御引上、御見廻遊興、何如々々、亭この茶湯之躰、花瓶の舟、菊をいけらるゝ也、掛物の玉室手跡也、初祖菩提達磨大師有之也、驚愚看候、

〔時慶卿記〕

五十

十月廿七日、天晴、桶湯ニ入、一禁裏、女院御所ヨリ御茶被遣トテ、昨日ヨリ白玉ニ梅花ニ山茶花等ヲ獻、珍藏主へ遣候、披露ノ由候、

是月、幕府、三河吉田橋ヲ修築ス、

〔別本敬公實錄〕

二

是月、幕府、修三州吉田橋、求材木、公命山村甚兵衛良勝辨之、

○是月、幕府、吉田橋ヲ修築スルコト、未ダ詳ナラズ、姑ク本書ニ據リテ、茲ニ掲グ、

林道春、江戸ニ之ク、

〔羅山林先生詩集〕

紀行一

元和辛酉十月、自京赴東武、柳生道宅・小川重胤・黒川光信饒

余到逢坂、作二絶以與之、

風雲送我慇懃意、雙袖不乾慷慨淚、情盡橋頭却有情、三條廣路鴨河水、

柳生道宅
小川重胤
黒川光信

尾張名古屋
城主徳川義
直木曾ノ材
木ヲ進ム

憶得藁砧山上山、少年豪友贈瑤環、心知一別又逢此、知與不知逢坂關、

〔羅山林先生集附錄〕

年譜上

七年辛酉

十月、赴江戸、

○道春、攝津・紀伊ニ遊ビ、攝津有馬ニ入湯セントシ、山城伏見ヲ發スルコト、四月十七日ノ條ニ見ユ、

元和七年十月是月

三八九

元和七年十一月三日

十一月 戊戌朔

三九〇

三日、子庚幕府、下野東照社ノ石鳥居ニ勅額ヲ賜ハラシテ、
宸翰ヲ染メ給ハントシ、是日、之ヲ曼殊院良恕親王ニ諮リ給フ、

〔京都御所東山御文庫記録〕甲二百九 後水尾院御聞書

元和七十一三、曼門御參、能書方之事種々有御物語、又尋申條々有之、今度日光山東照權現石鳥居、(曼殊院良恕親王)筑前福岡城主黒田長政下野東照社ニ石鳥居ヲ寄進ス、(曼殊院良恕親王)勅額所望之由、從武家被申、日光山東照大權現ト、八字ニ可書之由被申、其故ハ、彼鳥居、日光山入口ニ有之、東照大權現トハカリアラハ、根本ノ日光落第二、不可然、若又日光山トハカリアラハ、東照權現ニ寄進無其詮、依之、如右八字ニ可被相定云々、雖然山號ヲ書入タル例未見及、可爲如何様哉、其上額板タケ短難作之由示遣板倉周防守、(重宗)即以飛脚江戸へ可尋之由返答了、若不拘先例、可書八字之由、重而於所望者、可爲如何様哉、曼門御返答云、板ノタケ短クハ、日光山之三字ヲ一字之躰ニ可書歟、光ノ字ノハネヲ、間ヲ廣ク、其中ニ山ノ字可書入歟云々、殊勝之御申歟、又尋申云、先年東照權現樓門ノ額染愚筆、彼額東照大權現之五字也、今度又五字不可有子細乎、如何之由申處、曼門御返答、巖鳥居額裏表、(小野)弘法與道風文字無相違、然者無子

筑前福岡城主黒田長政
下野東照社ニ石鳥居ヲ寄進ス
曼殊院良恕親王
幕府之日光山東照大權現ノ八字ヲ請フ
山號ヲ書入ル
シレシ勅額ナ

東照社樓門ノ勅額

細乎云々、又問云、今度鳥居之額裏書上ニ宸翰ト書、次年號、次ニ黒田筑前守奉掲、如此書付度之由、板倉周防守雖申之、如此之事前代未聞、可爲如何様哉、曼門御返答、近代勅額裏書、年號月日計也、其外能書之衆官、實名等書之、是勅額ノ差別也、尊圓親王鈔物ニハ、如予強不載名字云々、雖然近代門跡等被載名字、又裏書之年號ニハ支干ヲノス、假令元和七辛年十一月三日、子庚如此、若其年ノ支干丙丁ナレハ、火ヲ忌故ニ除之、年ノ支干不載之時ハ、日ノ支干亦不載之、又額ノ裏書ニ、黒田筑前守名字ヲ可書事、無其謂、ムナフダナドノ如ク、別ニ板ヲコシラヘ、誰ニテモ能書之衆、其由來ヲカキ、額ノ板ノ脇ニ打付ルヤウノ事ハ、自然可有之歟、(大)先年太和國長善寺ノ額ヲ舊院被遊之時、(大)太和納言依所望被染宸筆由來等、尊朝親王別ニ被書付云々、如此事可然歟、

大和長谷寺ノ後陽成天皇勅額

曼殊院良恕親王參内

〔土御門泰重卿記〕四 十一月三日、庚子、晴、御番、予伺公、午時切々御尋之由承及候、予

朝參時刻申上刻、竹内御門跡御參候、及晡時御退出也、(曼殊院良恕親王)○下略、公家衆ノ素行ニ關シ難說、アルコトニカ、ル、下ノ條ニ收ム、
○幕府ノ請ヲ允シテ、東照社ニ勅額ヲ賜ハントシ、宸翰ヲ染メ給フコト、三年三月二十日ノ條ニ、幕府ノ使大澤基宿、參内シテ、勅額下賜ノ恩ヲ謝シ奉ルコト、同年六月四日ノ條ニ見ユ、

元和七年十一月三日

三九一

〔参考〕

〔日光山志〕

五 石御鳥居 總高二丈七尺六寸五分、柱石差渡し三尺五寸柱根入凡二尺

石鳥居ニ掲

五寸、地輪石八尺四方、東照大權現と彫たる文字置揚總唐銅の御額を掲ぐ、後水尾院の御宸

翰なり、○下

子祭アリ、又公家衆ノ素行ニ關スル雜說ニ就キテ、中務少輔土御門泰重ニ勅問アラセラル、

〔土御門泰重卿記〕

四

十月四日、壬申、雨天、女院御所伺公、源氏聽聞仕候、○女院權中

納言中院通

村ヲシテ、源氏物語ヲ進講セシメ、夕御退出之折節、近衛殿・中院御異見申入候、御傍承候、○下

元ノ議ノコトニカ、ル、八月二十四日ノ條ニ收ム、

十一月三日、庚子、晴、御番予伺公、午時切々御尋之由承及候、○中略、曼殊院良親親王參内セ、

予亥終刻召御前、公家之事、世中取沙汰有之由仰也、其由承及之由勅答申候、子祭也、御菓子、

又御てん・供獻等被下候、○下

廿四日、辛酉、晴、此邊諸公家衆、雜說有之也、承及、人々不知罪過、難嘆之身上也、京童之人口以外也、○下

京童ノ人口

子祭

一條兼遐等ヲ御前ニ召シ給フ

十二月八日、乙亥、晴、御番也、終日御前召、侍御雜談也、思召様子被仰聞候、忝事也、愚意少申上

候、勅許之様相見也、○下略、聯句御會ノコトニカ、

十一月、戊子、晴、○中略、御學問講ノコトニカ、早々伺公、今日御談合之事有之也、右府・中院・阿

野・予四人御前侍、勅定之趣被仰聞、忝御事也、人々愚意共申上畢、於常御所、三人共良子三枚

ツ、拜領、○下

十二日、己卯、晴、從中院、女院御所様伺同道可申候由被申候、則伺公申候、昨日於御所被仰

聞趣申上候、御驚事也、俄從御所召、伺公申候、昨日之御事被仰出候、彌々無事可然之由申上

候、其分相濟申候、○下

○典侍廣橋氏・權典侍中院氏・掌侍水無瀬氏・唐橋氏・命婦讚岐等ト、烏丸光廣・大炊御門

賴國・花山院忠長・飛鳥井雅賢・難波宗勝・德大寺實久・中御門宗信等姦淫ノ事露ル、ニ

依リ、勅シテ、廣橋氏以下ヲ其家ニ錮シ、光廣以下ノ官位ヲ停ムルコト、慶長十四年七月

四日ノ條ニ、家康、重ネテ、大澤基宿・板倉重昌ヲ京都ニ遣シ、官女處分ノコトヲ奏請ス

ルコト、及ビ幕府、猪隈教利逮捕ノ令ヲ諸國ニ下スコト、同年八月四日ノ條ニ、教利等ヲ

死ニ處スルコト、同年十月十七日ノ條ニ、右大臣近衛信尋ニ勅シ、伊勢安濃津城主藤堂

元和七年十一月三日

三九四

高虎ト謀リ、秀忠ノ女和子入内ノコトヲ幕府ニ議セシメラル、コト、元和五年九月五日ノ條ニ、秀忠ノ奏請ニ依リ、入道前權大納言萬里小路桂哲・權中納言中御門宣衡・同四辻季繼・左近衛權中將高倉嗣良・同堀河康胤・陰陽頭土御門久脩ノ不行迹ヲ責メ、桂哲ヲ丹波篠山ニ、季繼・嗣良ヲ豊後ニ流シ、宣衡・康胤・久脩等ノ出仕ヲ停ムルコト、同年九月十八日ノ條ニ、公家衆處罰ノコトニ依リ、宸翰ヲ右大臣近衛信尋ニ賜ヒ、讓位ノ叡慮ヲ傳ヘラル、コト、同年十月十八日ノ條ニ、徳川和子、入内スルコト、同六年六月十八日ノ條ニ、秀忠ノ奏請ニ依リ、桂哲等ノ罪ヲ赦スコト、同年六月二十七日ノ條ニ見ユ、

長門萩城主毛利秀就ノ父同宗瑞元輝秀就ヲ諭シテ、公私不謹ナカラシム、

〔毛利家文書〕 三

〔端裏書〕 〔毛利秀就〕
〔宗瑞様より長門様ニ御異見二十一箇條〕

國々ニ横目
衆アリ諸大
名ノ氣遣

松平忠直ノ
不行儀

一 くに／＼のよこめ候に付て、大みやうしゆ、よるひるのきつかい大かたならず候よし候事、

一 〔松平忠直〕 ちぜんなどの御しんしやう、よのつね此ころ御きつかいと申候、これと申、ない／＼

の御ぎやうぎあしく候につゐて、御かちうしゆも、しやうぎなきのよし候事、

一 御一もんさまなどの儀、なにたる御心まゝに候とも、御きつかいもなき事にて候へ共、

御ふんへつあしく候へり、その御うへさへ、〔松平忠直〕 かつざとのなとはしめとして、御しんしや

うあしく候事、○松平忠直、改易セララル、コト、二年七月六日ノ條ニ見ユ、

一 〔福島正則〕 ふくしまさへもんなとの、その身、りこんさいかくよにすぐれ、うへさまの御せん、のこ

るところなく候ても、くににてのぎやうぎあしく候事、ない／＼きこしめされ候て、かく

のこつく候事、○福島正則、改易セララル、コト、五年六月二日ノ條ニ見ユ、

一 そのほか御ぎやうぎよきしゆり、さだめて長門、江とにてよりあい見べく候まゝ、そのた

んの申におよす候、さやうのしゆをり、御ぶげんにしだい／＼になし申され候て、一は

う御ちからにさせられ、御いゑの御ちようほうになされ候よし候事、

一 そのほかのしゆの事の申におよす候事、

一 これほどの大事のじせつにて候に、〔公儀〕 くうぎのきつかい少もなく候て、よるひるなぐさみ

はかりにて夜をあかし、かちうのものをそろへ、大さけにて、おの／＼くたひれたるてい

元和七年十一月三日

三九五

松平忠直改
易セララル

福島正則利
根才覺世ニ
優ル

行儀好キ大
名ハ分限ヲ
進メララル

飲酒遊宴ヲ
戒ムベシ

元和七年十一月三日

にて候事、

一 よるいね候のす候ゆへ、ひる人なかにてねふり候事、

一 江とよりこゝもとへのほり候時、(宗)そう瑞に心をつけ、やうじやうの儀たんそくつかまつり候へと、のほりのたひくゝに、御ねんをいれられ候て、おほせきかせられ候よし、うけ給候事、

付、おとゝし、さやうへ御れいにのほり候時、御せんにおゐて、(秀忠)なかと(秀元)ひでもと、御せん

へ、われらどうぜんにめしいたされ候、ちさにやうしやうの儀、かたにおほせきかせられ候、そのとき御せんをたち候へり、又長門・ひて元を御せんへめしいだされ、いろくゝ御ねんを入られ、われらきふんいまにあしく候間、心をつけ、くにへさうくゝまかりくたり、かいふんやうしやうたんそくつかまつり候へと、兩人へ、つねくゝおほせわたされ候よし、(本多正純)かうつけとの・(土井利勝)おほいとのおほせきかせられ候事、

一 しかれとも、たんそくの儀の、我くゝゆたんなく候、なかと心かけにり、われくゝにきつかにかけ候のぬやうに候てこそ、なたるかうくゝにも、たんそくにもあいまし候事にてこそ候へとも、一せつそのところへり、ふんへつゆき申さず候事、

付、我々事、(榎本)久しく(榎本)もとくすりもちい候て、すどなんがんのところをとりなをし候、かのものちうぎのたんの、子ともにたいしありやうに存候り、ひるいなき事にて候、われくゝためとて、一ごんもとばをかけ、そのしるしをさし申さず候、たいゝなとよひくだし、たんそく候り、いかほととさうさいり申へく候や、そのたんの申におよひ候事、

一 長門よろつたんそくあつかい、ないくゝぶけいこのゆへ、ならさるたんも、もつともにて候へ共、はやよきほと三十におよひ候間、ぶぎやうそのほかあいてにつかまつり、ものをいひせ、さゝ候て、いまほとりこんのこしやうなとおほく候間、めしつかい、ことさいばんをもさせ候り、けつくはたくゝとやくにもたち、手ごにもなるへく候へとも、さやうのものをいひ見わけ候りて、まづおしくすりをかけ候、あるいとしひろい候をり、さやくしん候、又すこしの事をも、めしつかい候もの、さにあひす候とて、としよりもわかきものも、一せつよせつけす候に付て、ものを申候てり、さてと心へ、われ人ひつそく候て、しうのためよく候する事も、わるく候する事も、いろにもいだし候りて、こんにちくゝとようしや候てり候りかりに候、これにてり、やくにたち候するものも、いさゝかあるましく候

元和七年十一月三日

元和七年十一月三日

三九八

事、

公儀及ビ家中ニ就キテノ進言ヲ納ルベシ
公儀ノ事ニ過誤アラバ一大事ナリ

一江とにて、くうきの事をい申におよひす、かちうの儀も、さしたてうかゝい候てかなひさる事をも、こしやうしゆにて、ちとうかゝい候すると申候へい、御さしよくあしく候て、われ人はねあひ候て、申ものこれなく候間、申あげ候事少もなり申さす候、ことにくうきなどの儀い、すこしちかい候ても、一大事の二つ一つの儀に候事、

他所ヘノ返事ヲ速ニシ使者ニ對面スベシ

一よそよりのつかい、又返事などの事、おそく候て、たしよのものもはらをたて、あるいいたいめんにもあひす候とて、かへり、わるくちなと申のよし候事、

他所衆ノ面前ニテ召使ノ者ヲ惡口スベカラズ

一めしつかい候もの共を、たしよしゆのまへにてあつこうつかまつり候よし候て、めいわく申ものも候事、

饗應訪問ノ約ヲ守ルベシ

付、これいかに心やすきものとても、たしよのものいさやくしんある儀に候、そのうへ、此はうのものもはらたち候へい、ほうこうもならさる事、

饗應訪問ノ約ヲ守ルベシ

一江戸にて人をふるまい候事をも、又よそへまかりこし候ことをやくそく候ても、ときによりしちねんの儀もこれあるよし候事、

舊知ニ疎ク新知ノ多キハ不可ナリ

一ちぬんのしゆ、大小ともに、はしめよりかんようのしゆをい、したいにうとくなり候て、あ

所帶方ノ分別肝要ナリ

たらしきしゆおい／＼おほくなり候儀、せうしの事、

一しよたいかたのふんへつかんようの事、

諸人使用ノ注意

付、よく存候ぶぎやうのものとも申ところをよくき、そのものとたんかう候て、つかいかたのふんへつかんよう候事、

一とかく人をめしつかふ事、よくまへかたに申候やうに、ぎりすぢめ、又ほうこうのかん・

ふかんよく見しり候て、やくにたち候やうにめしつかい候事かんようの事、

一せんねんするかにて、御しよ徳川家世さま御わつらいのとき、御見まいにまいり、とうりうのう

ち、さるがくしんどうにうたひをうたひせ、又江とへかへり候てい、おどりなどありたる

よし、さた候つる事、

駿河及ビ江戸ニテ秀就ノ不謹慎
家康ノ遺物ノ拜領ナシ

付、さやうの事にて候つるや、しやうぐんさまより、御しよさま御ゆいごと候て、なに

にてもはいりやうなき事、

付、じよのしゆい、いろ／＼つかいされ候て、長門ぐいぶんぢちあしく候事、

一人あいらい、なぐさみなとの儀も、じぶんおりあひ見はからいかんようにて候事、

一なにこともふんへつのみへ、申におよひす候へとも、いくたひ申ても、御せんの儀一大事

將軍ニ對スル態度最モ

元和七年十一月三日

三九九

肝要ナリ

畢竟家ノ連
續ノタメノ

元和七年十一月三日

四〇〇

にて候、すこしもわるきめくみも候ての、申すことわりも、なか／＼やくにたゝす候間、御ねんころのところも、一とさに水になり候、こゝがおそろしく存候、さ候へり、かちうよりはやくあくじになり候、申もおろかに候、何と候ても、家の儀あいつゝき候て、御ほうこう候やうにとの、あさゆふのきつかいにて候、ひつきやうこのの申事まてに候、ふんへつよく候のゝ、すだいのいゑかゝり、日頼さま(毛利元就)常ゑいへの我々御とゞけ、此うへりなく候、めてたく／＼、此たん、よく／＼なかとへおほせさかせらるへく候、／＼、

已上

元和七

十一月三日

(毛利宗瑞)
右馬(花押)

うちへ

○本書、紙繼目裏ニ毛
利秀就ノ花押アリ、

秀就相嗜ム
ベキコトヲ
誓フ

御ケ條之趣、一具承届、御尤奉存候、随分相たしなみ可申候、此由可預御披露候、恐惶謹言、

元和七

十一月三日

秀就(花押)

御申之

六日、癸卯幕府、上野館林城主榊原忠政、下野眞岡邑主堀親良等ヲシテ、下野東照社奥院、廟塔、及ビ石垣等ヲ造營セシム、

〔本光國師日記〕 三十一 十一月六日、自鈴木近江、日光造營事始ノ吉日問ニ來ル、則書

付遣之、案在左、

崇傳ヲシテ
造營事始ノ
吉日ヲ勘申
セシム

造營始之吉日

一十一月十一日、戊申、成、木、

右天喜日、大明日、白虎脇日、以上、

十一月吉日考之、

一霜月十九日、堀作州日光へ參候由之候而書狀來ル、則返書遣ス、

〔本光國師日記〕 三十一 同日(元和八年正月二十九日)三齋へ返書遣ス、自筆之而認遣ス、廿八日之日付也、案左

之有之、

正月二日之尊書、同廿八日、於江戸拜見仕候、○中略江戸城修築ノコト、細川忠利、江戸參

ム、收 一日光之御廟堂塔以下御建立、石垣等舊冬ノ御普請被仰付候、日光近所之て

日光附近ニ
テ知行拜領

元和七年十一月六日

四〇一

元和七年十一月六日

四〇二

知行拜領之御衆、右之役被仕候由之候、當年四月、第七年之御當り被成候、其以前之出來候様之と被仰出候、定而御社參可被成かとの下にて沙汰御座候、一拙老義も去年八月之罷下、于今相詰申候、日光之御會式相澄み候者、見合御暇申上可罷上と存候、猶後音之追々可申上候、恐惶謹言、

正月廿八日

金地

三齋尊老様 尊答 ○端書略ス、全文ハ八年二月十八日ノ條ニ收ム、

〔譜牒餘録〕

五十一 永井日向守 覺書

重光嫡男

永井右近大夫大江直勝

普請奉行永井直勝

一同七辛酉年、日光山御普請奉行右近大夫被仰付之、翌成年出來、同四月、台徳院様日光山に被爲成、

重光嫡男

永井右近大夫大江直勝

一同七辛酉年、日光山就御造營、右近大夫奉行被仰付相勤、翌年出來申候、同四月、台徳院様日光山に被爲成、○秀忠、下野東照社第七回神忌ニ臨ム、於彼地御目見仕候處、御造營宜出來

榊原忠次

仕、御感之被思食之旨、御懇之預上意、○寛政重修諸家譜永井直勝譜異事ナシ、

〔寛政重修諸家譜〕

七百六 堀親良 美作守

二年の冬、日光山御廟石垣の普請をうけた

まのり、のち數度普請の事をたすけ、○下略

〔寛政重修諸家譜〕

百 榊原忠次 式部大輔

七年、日光山奥院御廟塔を造營により、石垣を

築き、をよひ材木運送のことをつとむ、

〔越後榊原家譜〕

坤 式部大輔忠次

同七年辛酉秋、日光山奥ノ院廟塔造營、石垣并材木

運送役ヲ申付ラレ、翌年三月落成ス、組下ニハ本多大隅守・日根野織部正等申付ラル、

〔寛政重修諸家譜〕

六百三 秋田俊季 河内守

七年、また日光山御宮修造の事を助く、本

書秋田實季、譜所見ナシ、

〔上州長樂寺由緒覺〕

東照大權現奥院御廟塔一基所

征夷大將軍從一位右大臣氏長者源秀忠公

御奉行本多上野介藤原朝臣正純

日光山座主山門探題大僧正天海

寶塔九輪覆針銘

奉行本多正純

元和七年十一月六日

四〇三

椎名兵庫助藤原吉久

元和八年壬戌四月吉日

○上野世良田東照宮成り、下野東照社奥院ノ廟塔ヲ之ニ遷スコト、正保元年十月十一日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔御當家記年録〕

五

(元和七年)

今年秋ヨリ日光山奥院御廟塔御造營、佐藤勘右衛門・長崎半左衛門・小倉忠左衛門奉行之、手傳者、本多上野介正純勤之、石垣及材木運送者、松平式部大輔忠次・奥平美作守忠昌・永井右近大夫直勝・本多大隅守忠純・水谷伊勢守勝隆・日根野織部正吉・堀美作守親良・那須與市資重・芦野民部資泰・福原内記資盛・伊王野豊後・岡本宮内義保・千本大和義定・大田原出雲増清等、各役之、此外淺野采女正長重・秋田城介實季・松下石見守重綱・大關右衛門高増・大田原備前守晴清・成田左馬助等、雖在此役、今年春逢江戸家宅火難、依之勤役之最中被除之、至翌年春成其功、(兵守)ルユト、正月二十四日ノ條ニ見ユ、

佐藤繼成
長崎元通
小倉正次
奥平忠昌
水谷勝隆
那須資重

淺野長重等
火災ニヨリ
テ役ヲ免ゼ
ラル

出羽久保田城主佐竹義宣、秀忠ニ謁ス、尋デ、義宣、武藏粕壁・下總栗橋同諸

川等ニ放鷹ス、

〔梅津政景日記〕

十

(霜月)

同六日、

(佐竹義宣)

一屋形様御登城被成候、御仕合之様子、公方様仰出之、鷹野へ御暇被遣候、更之爲御禮罷上候、御悦喜之被思召候、頓而御鷹野へ御出被成候間、其時可參由御直之御意之由御物語之候、御悦其かなく候、上下満足仕候、(中略)義宣、歳暮ノ衣調進ノコトニ

一天氣よし、(酒井忠世)一雅樂頭様へ御使之參候、籠谷主水を以申上候、右之同上野殿へ御使之參候、星野助九郎と申人之申置候、(備後)一津輕殿へ今朝御使之參候へり、御留守之由候て不懸御目之候、又あなた御使有、我等之御狀被下候、

津輕信枚

江戸町奉行
嶋田利正

永井尙政

霜月七日、一朝之赤見惣右衛門殿へ御使之參候、御鷹の鷹壹ツ被進候、(中略)義宣、歳暮ノ衣調進ノコトニ、(利正)一晚嶋田次兵へ殿へ御數寄之候、(備後)一天氣よし、

霜月八日、一朝道琢所へ數寄にて御出被成候、(備後)一晚長井信濃殿へ數寄之候、(備後)一天氣よし、

同日、(備後)一津輕越中殿へ爲御使者參候、御音信物、御小袖十・けせん十枚被進候、御留守之候間、乾四郎兵へ之申置罷歸候、其爲御禮近藤石見殿御同心之候、越中殿爲御見舞御出被成候、一神山右衛門爲御見舞被罷出候、一二ノ丸宰相様へ右被進候御鷹、あわい悪敷由次

元和七年十一月六日

四〇五

けせん
近藤秀用

兵へ殿被仰之付、引替被進候へり、其爲御禮御使者、御鷹ノ鷹二ツ被遣候、一天氣よし、

霜月十日、○中 一二ノ丸さまへ昨日の御鷹の鳥爲御禮、御出被成候、○中 一天氣よし、

霜月十一日、(正統) 一井上主計殿へ、數寄にて御出被成候、朝也、○中 一天氣よし、

霜月十三日、○中 一松平下野殿へ、爲御使參候、御留守之候間、とのいけ藏人と申仁ニ申置、

罷歸候、御狀御口上有、一明日の代之下風呂立、一天氣よし、

德川頼房

霜月十六日、(志) 一三戸ノ宰相様へ晚御振舞にて、御出被成候、御供致候、一秋田ノ御鷹夜半

之參着、秋田にてとれ候若太鷹貳ツ、同山歸貳ツ、松前ノ參候若太鷹貳ツ、主税不被飼鳥屋兄

鷹壹ツ、何も無事之參候、一天氣よし、朝ノ夜ル迄厚、

同十八日、一去廿三日之罷上候御走衆松下四兵へ、秋田へ返し申候、半右衛門所へ返事之

様子、御進上塩引はらら子からさけ、根田四郎右衛門如書付請取候由、又先立被仰遣候御

松前ノ鷹

材木、野代へ被申付候由御心得之由、急出させ可申由、又松前ノ參候御鷹、藤右衛門殿久作

殿、茂右衛門殿ノ進上之兄鷹、何も御心得之由、又秋田ノ罷上候御鷹共無事之參着候由、とや

太鷹之事、又秋田之御座候御鷹共、念ヲ入候様ニ、相澤丹後ニ可申付由、又山々替之儀、如毎

れいてんく
ノ極印

知行書付

金地院崇傳
鷹匠ノ扶持

年遣可申由、院内銀山へり、餘人無之候間、菅谷隼人を遣可申由、又野代善介替之眞崎長右衛

門申付候由御心得之由、又只今迄持來候はかり、座半分の直にて、れいてんく極印極度由、せ

りて御座候由、諸人のため之候間御心得之由、又彦二郎殿御出仕之様子、○義直、秀忠ニ謁ス

ノ條ニ 又江間主典、鶴賀御軍役板極罷下候由、又屋形様御仕合如思召之段具之申遣候、又山

方内匠、岡彌八郎、六戸勘四郎、太窪五郎八、關甚八之被下候知行御書付之内五十石不足候

て、内匠之渡不申由被申上候、何方にてもはからい渡候へと御意之候、又此便之、立歸ノ夫三

人返し申候間、碩庵の誂さる物貳ツ、く、り袴壹ツ、手前のくら壹口指越申候、一朝之神尾

形部殿へ、數寄にて御出被成候、晚内藤外記殿へ、數寄にて御出被成候、一天氣よし、

霜月十九日、一朝金地院へ數寄にて御出被成候、一御小番八嶋彌介、川口彦右衛門、下田

甚吉、伊藤勘左衛門と申者御鷹匠之罷成候間、何なみに御切符まし被下候様にと、平野主税

申候間、披露致、貳十目ツ、の御加さう、其内甚吉、勘左衛門、跡二人御扶持之候間、是も御

鷹匠なみに壹人分の御加扶持被下候、又横手御鷹匠、淺利長介、相果候、御扶持貳人分、子共

のうし之被下候、其おぢふかほり伊兵へと申者、牛せかれの間、代之御奉公可致候間、長介之

被下候御切符うし之被下候様にと申候間、銀五十目の新給申出し候、高屋五左衛門頼候間、

右之様子之候、同五左衛門指南下田傳右衛門・淺利勘兵へ・深堀二介あと貳人ふち被下候、妻子持候て、江戸上下を致不罷成由申之付、御加扶持壹人ツ、被下候、又御中屋之者共御切符之訴訟小室惣左衛門申之付、御加給貳百五十文小右衛門、貳百五十文彌兵へ、五百文専八、貳百五十文甚太郎、三百文小左衛門、貳百五十文甚吉、新給壹貫五百文與兵へ、壹貫久次、壹貫彦作、何も代物也、付、彦作新御扶持壹人、おふご彌左衛門妻子を持候て、貳人御扶持之て不罷成由申之付、御加扶持壹人、右何れも御印判申請、主税(薩橋下野部賀部)のかや橋之候間、五左衛門と惣左衛門之渡置候、一天氣吉、

秀忠義宣ニ
大鷹ヲ與フ
義宣粕壁ニ
赴ク
中野笑雲

鷹ノ名

霜月廿日、一從公方様鳥屋太鷹貳ツ御拜領被成置、爲御禮御登城被成、御鷹野之御暇罷出候之付、俄之日暮時分江戸御立被成、かすかへ迄御座被成候、一今晚ノ御數寄正雲(中野笑雲)へ御約束被成候へ共、右之様子之候間、拙者御使之て被仰分候、一加藤(伊藤則勝)いほり殿へ御小袖五ツ、御狀被遣候、拙者御使之參候、御城へ御座被成候由、御番所之て掛御目之、明日御返事ハ可被成由、御直之御口上之て、罷歸候、一拙者御留守之罷有候へと被仰付候、就之御鷹被指置候、御書立被預置、何も病鷹之候間、指圖を致、餌をかわせ候へと、御藥二色被預置候、御鷹ノ覺す、れこ若鷹・羽さけ・津輕山歸・板井田山歸す、れこ山歸・おぬけ山歸・鳥屋の兄鷹・御はい

義宣若大鷹
ヲ秀忠ニ獻
ズ
牧野忠成
稻垣重綱
猪子一時

銀小判二千
兩
鐵炮

鷹三ツ、但御はい鷹の内くす、夜の内死、一天氣よし、

霜月廿一日、一御鉄炮箱四ツ、御鷹野場へ差上候、此便之、以粕(島田重次)の御返狀遣申候、但荷壹駄、奉行御小人、一若太鷹貳ツ、御城へ御進上被成候、何も御意之入候て被納置候、高屋五左衛門・江戸十藏隙明候て、御鷹場へ被參候間、まき野駿河殿・稻垣平右衛門殿・猪子(二時)内匠殿御返狀、五左衛門之頼候て指上候、又くすの御はい鷹死候様子、其外御鷹共之あわいの様子、具之被申上候へと申渡候、一天氣吉、

同廿二日、○中一去八日の日付之て、半右衛門所(梅津源忠)が六供衆名をかへ候様子、又御社務ヲ一乘院之被立替、遍照寺を被直置候様子、正堂院(前)へ興山寺を被直置候様子、銀小判貳千兩被仰付候様子、又若弟鷹廿五日以後罷出候様子、又鉄炮のから三千出來、頓而可指上由申上候、飛脚、私への狀、栗橋(下總野郎)之て御披見被成、御返事ハ被遣候由、森田傳五書狀指添、半右衛門書中も越申候、其便之傳五所ノ御意之通申遣候分ハ、す、れこ若弟鷹善兵へ之すへさせ候て、廿七日之爰元を立、御渡野へ可着上由、即善兵へ之申理候、此飛脚ノ便之、秋田ノ女共申越分ハ、去三日之おまつ祝言相極候由、一天氣吉、一御留守中書判之て人を出し候へと被仰付候間、今日ノ人細申付候、

丹羽長重

栗橋ヨリ諸
川ニ移ル

義宜獲ル所
ノ鷹ヲ日野
唯心等ニ贈
ル

元和七年十一月六日

四一〇

霜月廿三日、一廿一日之丹羽五郎左衛門殿(長重)參候御狀之御返事、御渡野(栗橋)被遣候間、御走之衆之遣申候、五郎左衛門殿も御留守之御座候間、御宿之指置候由申候、屋形様之今日栗橋(栗川下總孫島郡)もろ川へ御出被成候由、傳五申越候、一板井田山歸、おち申候、一天氣吉、同廿四日、一つ、れこ山歸、おち申候、一天氣よし、

霜月廿五日、一朝太田内藏丞にて振舞有、晚宗句にて振舞有、一御渡野もろ川(信長)御飛脚有、御鷹の鷹、日野唯心(探定)へ二ツ、赤見惣右衛門殿へ二ツ、津輕越中殿へ二ツ、拙者(信成)も壹ツ被下候、唯心へ(近江)古谷掃部右衛門を指越申候間、御返事有、惣右衛門殿へ御走之衆之指越申候へ、御湯治之由候て、御番所之衆之預ケ置罷歸候、津輕殿へ我等持參致候様こと、被仰遣候、夜之入候間明朝參上可致と存、預置候、一ひる天氣吉、夜ル雨少ふる、

霜月廿六日、一昨日もろ川被遣候御飛脚返し申候、唯心ノ御返事津輕殿ノ御返事岩城四郎二郎殿、道琢所(磯江重光)彌五郎への書狀、赤見伊右衛門殿私への返事、兵部少書狀、拙者書狀遣申候、一朝信兵(信太兵衛少輔)にて、拜領ノ御鷹の鷹振舞有、一川邊(武藏埼玉郡)傳五御内書便之有、様子(信太)の御數寄屋の御料理ノ間疊の表かへ可仕由、ろうかの無用之由被仰付候、一天氣吉、一下ノ者切符出極、

同廿七日、一信太兵部少(東金、上總山武郡)とうかねへ、爲御使被參候、一一昨拜領の鷹、各へ今朝振舞申候、一つ、れこ若弟鷹、善兵へこそへさせ、川邊へ指上申候、一曉雪少ふる、朝かくもる、八ツ時(夜)夜ル迄雨ふる、一御臺所出來、新家へ移候御祝儀之振舞有、

霜月廿八日、一朝二川井主水所にて振舞有、一川邊御飛脚、御鷹之鷹十三被遣候、右内二ツ(二下同)の次兵へ殿、仁ツ(堀田)の以柏、仁ツ(堀田)の堀田若狹殿、仁ツ(堀田)の土方掃部殿、白鷹壹ツ、眞鷹壹ツ(田政)の米津勤兵へ殿、白鷹壹ツ、眞鷹壹ツの猪子内匠殿へ被進候、即相届申候、次兵へ殿、以柏への御狀なし、拙者持參致候、一朝少雪ふる、ひる天氣吉、

霜月廿九日、一昨日御鷹之鷹被遣候猪子内匠殿、堀田若狹殿、土方掃部殿、米津勤兵へ殿御狀之御返事有、以柏御禮狀有、今四ツ時御飛脚返し申候、次兵衛殿への御口上の御禮御返事迄之候間、其段拙者文之申上候、鷹かけさを古ノ貳本、新敷貳本指越申候、一朝根惣内にて振舞有、晚御臺様(義宣多賀谷氏)にて御振舞被下候、○中略、近江大津ノ藏米算用ノコトニカ、ル、一天氣よし、一嶋田次兵へ殿御狀、蜜柑御渡野へ被進候便之遣候へと、八ツ時被下候、御臺所へ預置候、

同晦日、一御臺所御看參候便之、次兵へ殿御狀、蜜柑指上申候、一根本忠左衛門秋田へ罷下候、(近江滋賀郡)大津御算用も極候由、半右衛門所へも、又御渡野へも申上候、殊之拙者鷹取候鷹御渡

元和七年十一月六日

四一一

堀田一繼
土方雄重
米津田政

利正義宣ニ
蜜柑ヲ贈ル

義宣酒井忠
世同忠利青
山忠俊等ニ
獲物ノ鷹ヲ
贈ル

野が被遣被下候、半右衛門所へ指越申候、一天氣よし、
極月朔日、一信太兵部少東金を被罷歸候、一御渡野の御鷹之鷹六ツ被遣候、仁ツの酒井
雅樂殿へ御狀有、仁ツの同備後殿へ御狀有、仁ツの青山伯嗜殿へ御狀有、七ツ下ニ參着、即拙
者持參仕候處ニ、伯嗜殿の御返事有、雅樂殿の御留守、籠谷主水を頼指置候、備後殿の
御城御番武藤與介と申人ヲ頼指置候付、拙者鷹取申候とて、いぬ鷹壹つ被遣被下候、一天
氣吉、

極月二日、一昨日の御飛脚、雅樂殿・伯嗜殿・備後殿御返事罷出、今巳ノ刻御鷹野へ指上申
候、傳五所へ之返事致候、一酉刻さかり川邊の、朔日ノ御日付にて、嶋田次兵へ殿の蜜柑・
御狀被進候、御返狀有、即持參致候へ、次兵へ殿御直ニ被爲合、公方様明日還御之由、只今
申來候間、○秀忠、上總東金ニ放鷹スル、早々飛脚にて申上候へと御意被成、御狀被遊被下
候、即罷歸、戌ノ刻栗橋へ差上候、今日栗橋迄御出之由、先立ノ傳五御内書ニ有、一天氣吉、
極月三日、一昨夕戌ノ刻ニ遣候御飛脚、栗橋へ丑ノ刻ニ參着致候由、餘ノ御飛脚を以、次兵
へ殿へ御返事有、兵部少、拙者所へ傳五御内書遣申分、次兵へ殿への御狀、兩人持參候事ハ
無用之由、誰ニ成共遣候へと御意之由候間、兵部少狀を指添越被申候へと申渡候、屋形様御

義宣室多賀
谷氏肩衣袴
ヲ梅津政景
ニ與フ
義宣江戸ニ
歸ル

仙北秋田大
雪
土井利勝佐
倉ヨリ江戸
ニ歸ル

歸之儀ハ、明日七ツほと爰元へ御着可有由、此飛脚戌ノ刻參着、○中 一天曇ル、
同四日、一朝介川源七にて振舞有、一御臺様を御かた衣袴被懸御意候、一彦二郎殿昨
日栗橋迄御出之由、（草加、武蔵足立郡）さうかの御着、一屋形様栗橋を七ツ時御着、御機嫌吉、一天氣よし、
極月五日、一御鷹野の御歸被成ニ付、御城へ御出被成候、御鷹の鷹五ツ御進上、○中 一天
氣よし、
極月六日、一御鷹之御手柄菱喰仁ツ御料理にて、御供ニ罷上候衆無殘八ツ時御振舞被成
候、一御厩隼人秋田を去月十五日ニ罷立、今日參着、半右衛門所の書中有様子ハ、爰元へ
御鷹共罷登候、彼若弟鷹三ツ、秋田・仙北之内にてとれ候由、又松前へ參候彼の御鷹師、渡海、
何と御座候哉、于今不參由、又秋田・仙北近年無之太雪之由、（天）何も披露致候、一土井太炊殿
（佐倉、下總印旛郡）さくらら今日御歸之由、就之爲御使御鷹の鷹三ツ持參候、一主税頼申之付、川口喜右衛門
と申御小番、御切符貳貫五百、村井兵吉と申熊鷹遣子共之由、御切符貳貫五百、何も御切手
取、平野主税之渡、一天氣よし、

極月七日、一御鷹師十兵へ惣右衛門・横手衆仁介、秋田へ罷下候、此便之、爰元御仕合之様

子、半右衛門所へ申遣候、又御茶屋のかま壹ツ、あまりかち夫之被遣候、十兵へ之渡、半右衛門所へ添狀致候、○中一天氣よし、

鷹師高根澤
孫兵衛ノ訴
狀

同八日、一御渡野にて欠落致候高根澤孫兵へ、去六日之晩表御門ノ出かうしか足輕を頼、彌五郎下正兵へ所へ書中遣、其身の見へ不申候、其狀之様子、十月うなかみへ御鷹買之御鷹師志賀舍人、輕米佐々右衛門と參候て、はやふさ三ツやすぐ買候て、金貳兩ツ、之買申たる由申上、はやふさ三ツの分小判六兩うけ取、あまりかねを三人してわけぬすみ候と見へ申候、舍人の秋田へ罷下候、以來孫兵へ運歩いたし替、此かね佐々右衛門方へ返し度由申候へり、舍人渡候間、舍人之返し候へと挨拶致、不請取由、其後佐々右衛門も秋田へ下候由、彼孫兵へ、主税之右之様子内々にて物語致候由、主税も兩人ノ御鷹師罷下候間、せんさくも不罷成居候由、彼と云是と云、方々申廻候内下候、存たる者も多候て、ぬす人同類にて、訴人之出候かと沙汰も下々御座候ヲ承、有かね、欠落致候と見へ申候、彌五郎被存分も、國本之罷有孫兵へ親、女房被押置候而、以來罷出、右之様子申上候へり、我等失念之可被思召候間、此狀之趣御披見之入度由被申候間、右之様子掛御目之申上候へり、被仰出分り、沙汰之限之仕合之候、乍去孫兵へ此狀を以、御鷹師之者共曲事しれたる事之候間、御國之被押置候孫兵へ親、

鷹師等ノ不正

幡屋小兵衛
等ノ行爲

女房之いかもい不申、舍人、佐々右衛門重類共之、相澤久右衛門、平野丹後之被預置候、其段半右衛門所へ申越候へと被仰付候條、今未ノ刻御小人兩人早飛脚之申付、秋田へ遣申候、又此三人不參以前、幡屋小兵へ、下田甚吉、鹿嶋へはやふさ買之被遣候、其引付を以、右三人も所望致たる儀之候間、爰元にて押置候へと被仰付候條、主税之申渡、御鷹師衆之小兵へ大小ヲ取預置、右之様子、平野主税と高屋五左衛門を以穿鑿致候へり、此書付也、一金子五兩請取申、かしまへ御はやふさ所望之參候、さうちうの彦十郎と申者之所こやと取申候て、居申候、御はやふさの、やとの彦十郎ヲ同心仕候て、うなかみへ罷越候、御はやふさをり、彦十郎相調申、壹ツ之付金子貳兩宛彦十郎之相渡、貳ツノ御鷹請取申候、相殘壹兩之金子の、跡々御はやふさの手付ノ分こ、彦十郎之相渡申、則切手ヲうけ取申候而、舍人かしまへ參候付相渡申候、あとの御はやふさのねの儀り、我等存不申候、以上、元和七年極月八日、高屋五左衛門殿、本野ちから殿、幡屋小兵へ、下田甚吉の、かや橋へ御鷹すへ之罷越、于今不罷歸候、一十六日之晩取上源五郎殿へ御振舞之御出被成候御禮狀、爲御使持參候、一ならへ諸白買之遣申候相坂所左衛門罷歸候、新酒參駄、古酒貳駄合五駄買參候、一天氣よし、一赤見惣右衛門殿、大豆十表、但三斗五升入、被懸御意候、

奈良ノ諸白

元和七年十一月六日

四一六

極月九日、一朝道三法印へ御數寄にて、御出被成候、○中 一天氣よし、

同(極月)十一日、一土井太炊殿へ鴈ノたゞき貳桶被進候、爲御使持參致候へり、御直ニ御返事有、

一赤見惣右衛門殿(一繼)大豆被下候、爲御禮參候へ共、御機合氣ニ候間、不掛御目ニ候、一朝

猪子内匠殿へ數寄にて御出被成候、晝堀田若狹殿(一繼)へ數寄にて御出被成候、一御鷹師下田

甚吉かや橋(一繼)參候間、鹿嶋にてのはやふさの様子尋候へり、小兵へ口ニ不替、乍去大小請取

御鷹師衆ニ預ケ置候へと、主税・五左衛門ニ申渡候、一天氣よし、○中 一かや橋ニ罷有候

太嶋助兵へと申者、信太兵部少申上、知行開之内百石被下候、就之爲御禮罷出候、鯉貳ッ進

上、若狹殿へ御出候時、上御臺所ノわきにて、懸御目ニ候、

極月十二日、一朝森川金右衛門殿(兵信)へ數寄にて御出被成候、一下野様明晚御出ニ付御禮

狀被遣候、爲御使參候へり、御留守ニ候間、さうしや番加兵へと申人ニ預置罷歸候、○中 一

天氣吉、

極月十三日、一松平下野殿(浦生忠郷)、御數寄にて御出被成候、其爲御禮御使ニ參候、一天曇ル、

同十四日、一朝板見喜(伊丹喜之助)ノ介殿へ數寄にて御出被成候、晚坂邊三郎兵衛殿(部一廣勝)へ數寄にて御出

被成候、○中 一天氣吉、

義宣土井利
勝ニ鴈ノ敵
ヲ贈ル

堀田一繼ノ
數寄ニ赴ク

森川氏信ノ
數寄ニ赴ク

蒲生忠郷ヲ
數寄ニ招ク
伊丹康勝ノ
數寄ニ赴ク
坂部廣勝ノ
數寄ニ赴ク

登城ス
小鼓道也

最上義俊

紅葉山參詣

極月十五日、一朝御登城被成候、一晚久貝(正俊)左衛門殿・同八兵衛殿、小鼓道也へ御數寄

有、○中 一朝略ひる迄(天)大雨ふる、晚天直ル、

同十六日、一朝井上新左衛門所ニ數寄にて御出被成候、○中 一晚略竝上源五郎殿へ御振舞

にて御出被成候、一天氣よし、

同十七日、一朝紅葉山へ御參詣被成候、御供致候、一小野崎左近御走(天)太山三郎兵へ、鹿嶋

ハ罷歸候、爰元にて幡屋小兵へ下田甚吉書付のとく、さうちうのそのべ彦十郎、うなかみの

小川戸村喜右衛門書付、不相替、小判貳兩之はやふさ壹ッ宛賣候由書付有、就之即小兵へ甚

吉をい、無子細由被仰出、御ゆるされ候、舍人佐々右衛門・孫兵へ鷹買候所り、鹿嶋にも、うな

かみにも無之由、小兵へ甚吉所、彦十郎御鷹之手付ニ、壹歩四ッ預り置候をも、舍人佐々

右衛門かねにて、うけ取罷歸候由、彦十郎書付致候、右便ニ、御はやふさ壹ッ壹兩壹歩ニ、小

野崎左近所望致參候、一晝天氣よし、夜雪五寸ほどふる、

極月十八日、一晚、松平下野様へ、數寄にて御出被成候、其爲御禮、下野様夜ニ入御出ニ付、

御返しとして、屋形様にも御出被成候、御供致候、一天氣よし、一曉うつゝ、くれな

ゐに色かわりなすつへきをみとり先たつあさ葉のまつ

元和七年十一月六日

四一七

榊屋道句

元和七年十一月六日

四一八

極月廿日、一晝ますやの道句所へ、數寄にて御出被成候、○中略一ひる天氣よし夜ル少雨ふる、

スン子
籠

同廿一日、一天曇ル、一秋田の村上卒右衛門罷上候、鮭ノすし子仁百・同子籠百・小鹿た
ら三十七・仁加保たら三十八、半右衛門書狀有、鉄炮のはやかう四匁入千・三匁入千六百・貳
匁入千、合三千六百、是又指上候由、夜半ニ參候間披露不致候、

丹羽長重

極月廿二日、一朝丹羽（羽）五郎左衛門殿へ、數寄にて御出被成候、一御がいき氣つよく候て、
（丹羽長重）霄の御寢被成候、一天氣吉、一下風呂立候て、各へ振舞申候、

朝倉宣正
久世廣宣

同廿三日、一朝淺倉筑後殿（宣正）へ數寄にて御出被成候、晚久世三左衛門殿へ數寄にて御出被
成候、一秋田の罷上候たら十ッ、嶋田（重次）以柏・赤見惣右衛門殿へ被進候御使ニ持參候、一
天氣よし、

義宣蒲生忠
郷ニ鷹ヲ贈
ル

同廿四日、一松平下野殿へ、御鷹御所望之付、よみ歸之若弟鷹被進候、爲御使、平野主税之
すへさせ參候へり、昨夕伊與殿御出被成、太酒（天）之由候て、御寢被成候由、安達内匠助と申人被
罷出候間、其衆ニ、御鷹、御口上之通申渡罷歸候、其後右之内匠助を以、御禮狀有、一ひる天
氣よし、夜曇ル、一村上卒右衛門、秋田へ返し申候、

鳥居成次

極月廿五日、一晚鳥居（成次）土佐殿へ、數寄にて御出被成候、一天氣吉、

天秤役

同廿六日、一高根澤孫兵へ欠落申之付、かや橋が被遣候御飛脚罷歸候、半右衛門所が拙者
所へ書狀有、孫兵へ親新右衛門、孫兵へ女房押置候由申上候、御披見ニ入申候、又別昏ニ、根
本新藏人、去月廿九日ニ相果候由、是（小傳）の小傳次殿が彌五所へ被申越候由にて候間、拙者の披
露不致候、又遠山久右衛門五六日煩候て、當月二日ニ相果候由、先御下迄り、下代好身之者
ニ、天鉢（中略）役の申付、指置候由申上候、御心得之候、一朝丹羽五分左衛門殿・猪子内匠殿・堀田
若狹殿・青木民部殿へ御數寄有、一せちふん也、一天氣よし、

寺澤廣高

極月廿七日、一晚寺澤志摩殿（廣高）へ、數寄之而御出被成候、○中略一天氣能、

志賀舍人等
集買入ノ金
ヲ盗ム

極月廿八日、○中略義宣歳暮ヲ幕府ニ賀スルコト、一去十九日ノ日付之而、窪田が飛脚有、
同八日ノ日付にて遣し申候飛脚返事也、志賀舍人・輕前（志賀）佐左衛門、かしま海上へ、御はやふ
さ買之參、金盜候事うたかいなく候間、孫兵へ・三森四郎左衛門之壹歩三ッ返し候を、舍人う
け取、それかけ落候いと存候へ共、女房をめしつれ罷出事不罷成候而遅々致候と申候
而、大小不渡、服（服）を切死候由、佐左衛門の大小渡し候間、番を付指置候由、是も、何之而も申分
の無之候由、半右衛門所より申越候間、則披露致候、一天氣能、

舍人割腹シ
テ死ス

同晦日、一一昨秋田の罷上候飛脚、石川彈右衛門指南之御小人、半右衛門所へ御意之通申

元和七年十一月六日

四一九

義宣佐左衛門ノ成敗ヲ命ズ

元和七年十一月八日

四二〇

遣候、輕米佐々右衛門成敗可致由、又檜山若弟鷹、とや兄鷹餌喰惡敷候て、鳥をひき餌ニ計喰候間、とよまさへ、さちうち二人を遣候由被申上候、とよまさにて、てつほううち候事無用之由、御意ニ候、(庄)新城之内黒越村・五十丁村、此兩村こさち多候間、御えさし(檢)二慥成檢使を指添、わなこてもあみにても、さちとらせ候て、あわいあしき御鷹こかわせ候へと、御意ニ候付、御藥被遣候、又遠山久右衛門相果候様子申上候段、天鉢かけ候者共之儀、右之通具ニ申遣候、○中一大さくの馬、赤見惣右衛門殿御望之由候て、御狀被下候間、即爲引進上致候、御祝着之由、尙御禮狀有、一松平下野様へ若弟鷹被進候、爲御禮下野様御見舞被成候間、屋形様ニも、其爲御禮御出被成候、○中一天氣吉、

○出羽久保田城主佐竹義宣ノ數寄ノコト等、便宜合致ス、

八日、乙延曆寺惠心院良範ヲシテ、法華科註ヲ進講セシメラル、

〔土御門泰重卿記〕

四

十一月八日、乙巳、晴、御番、神事如常、於御所惠心院(良範)僧正法花科

青蓮院尊純等ノ陪聽

註講談聽聞候、青蓮院門主・五山長老西堂、以上七人、公家(實顯)ニ阿野中納言・中院中納言・西洞

院右衛門督・予(時直)・姉小路等也、夕供御ハ青門と御相伴申候、中院阿野・予三人也、其以後半夜過迄侍御前、

〔鹿苑日録〕

五十

十一月八日、山門惠心院、於禁裡講法華、爲聽聞而伺候、賜饌而歸、

〔門主傳〕

二十五

○華頂要略十四所收

圓智院二品法親王諱尊純

(十一月)

同月八日、伴惠心院良範僧

正參内、於御學問所、有法華講尺、

大日本史料 第十二編之三十八終

元和七年十一月八日

四二一

XII.

DIARY OF RICHARD COCKS, CAPE-MERCHANT IN
THE ENGLISH FACTORY IN JAPAN.

1615-1622.

Tokyo. MDCCCXCIX.

Vol. II. Pp. 143-144.

February 26 (Shonguach 15). [1621]—And I was enformed that Gonrok Dono hath promised the capt. moro at Nangasaque to procure the Emperours passe or *goshon* that the carick of Amacon shall trade freely into Japon to Nangasaque yearly, in despite both of us and the Hollanders.

the kinges marriadg and his safe retorne.

September 19 (Fatchinguach 14).—Ould Nobisane, called Bongo Dono, died ij daies past, which was said to dy before the king arived.

September 25 (Fatchinguach 19).—This night, after midnight, the dead corps of Bongo Samma was carid to be burned, or rather a peece of wood in place, for he was thought to be a Christian. All the nobilletye with a multetude of other people did follow the hearce. The cheefe mornar was a woaman, all in white, with her haire hanging downe her back and her face covered, and a strange attire upon her head like a rownd stoole. All the *Boses* (or pagon priestes) went before the herse with great lightes, and the nobillety followed after, all in generall with such silence that noe words weare spoaken; and they kneeled downe in divers places, as though they had praid, but not one word heard what they said. And in many places they threw abroad *cashes* (or brasse money) in great quantety, and in the end most of all at the place where he was burned, that the people might take it, as they did allso much white lynen cloth which compased in a fowre square place where the herse was burned. And there was one *bose*, or prist, hanged hym selfe in a tree hard by the place of funerall, to accompany hym in an other world, for *booses* may not cutt their bellies, but hang them selves they may. And 3 other of the dead mans servantes would have cut their bellies, to have accompanid hym to serve hym in an other world, as they stidfastly beleeve they might have donne; but the king would not suffer them to doe it. Many others, his frendes, cut affe the 2 foremost joyntes of their littell fingers and threw them into the fire to be burned with the corps,

thinking it a greate honor to them selves and the least service they could doe to hym, soe deare a frend and greate a personage, for he was brother to Foyne Samma, grandfather to the King Figen a Came, that now is. And he hath adopted Gentero Samma, the kinges brother, for his lawfull sonne, because he had no children of his owne, and hath left all he hath to hym, he being the kinges pledg at Edo.

XI.

DIARY OF RICHARD COCKS, CAPE-MERCHANT IN THE ENGLISH FACTORY IN JAPAN.

1615-1622.

TOKYO. MDCCCXCIX.

VOL. II. PP. 219-220.

November 14 (Junguach 11).—And the ambassadors of the King of Syam, which are now returned from themperours Court, where they were royally receved, did com to vizet our English howse, accompanied with Capt. Yasimon Dono of Nangasaque and a man which themperour sent with them from Edo to accompany them to Nangasaque. The ambassador gave me a barrill of wyne for a present, and the Japon which accompanid hym from Edo an other. And the ambassador requested me to geve hym a letter of favour with an English flagg, yf in case they met with any English or Hollandes shippes at sea; and Capt. Yasimon Dono did desire the like: which I promised to them both to performe. And I sent a pottell glasse bottell of annise water for a present to the ambassador, which he took in very good part.

but three Chinese vessels of little value, which were coming to this city. A ship and a patache were sent from this coast of Manila to Maluco. It is well known that the ship was lost on the same coast by running aground, although the Hollanders hide the fact. The patache, driven by contrary winds, soon put into harbor. It reached Firando on the fourteenth of July; and as soon as it secured munitions, provisions, and people, it was sent to wait for the Portuguese galeotas which were going from Macan to Japon. But it was the Lord's will that it should not find them, and so it returned to Firando. On October 3, however, it was sent to Pulocondor [*i. e.*, Condor Island], opposite Camboxa, with thirty men, fourteen pieces of artillery, munitions and provisions, to search for the crew and artillery of a ship that the Hollanders lost there.

.....

The quantity of munitions and provisions which the Hollanders secure every year from Japon for supplying all their fortifications is very great, and therefore if they were not harbored there, it would be a great injury to them and of much benefit to these islands.

.....

Since writing this, I have learned that a large junk (a certain kind of ship) set out from Japon with a large quantity of provisions and munitions of war, and with five hundred infantry, whom the Hollanders were bringing to supply and reënforce their strongholds in the Malucas. But God was pleased that they should run aground on the coast of Japon, where everything was lost, and nearly all the people were drowned. A galleon

likewise set out from Japon with a Dutch patache to come to these coasts, to steal whatever they could, as they have done in years past. But God frustrated their attempts by running the galleon aground on Hermosa Island, which is between Japon and this country. It is said that all those on board were drowned. Although this is not known surely, it is a fact that many were lost.

May God confound their arrogance, in order that this land may raise its head; and that the faith of Christ may be spread throughout many provinces and kingdoms into which the holy Evangel would enter were it not hindered by these heretics, who have hitherto been such a stumbling-block and so great an obstacle in these parts.

It has occurred to me to write this to your Reverences as a consolation to many people who wish to know about affairs here. May God keep all your Reverences, to whose holy sacrifices and prayers I earnestly commend myself. Manila, June 14, 1620.

X.

DIARY OF RICHARD COCKS, CAPE-MERCHANT IN THE ENGLISH FACTORY IN JAPAN. 1615-1622.

TOKYO. MDCCCXCIX.

VOL. II. PP. 190-191, 199, 201-202.

September 1 (Sitinguach 25). — The report is that Bonga Dono is dead, and that he died the day before the kinges arivall; and yett it is not published till the feasting be past for joy of

as in tyme past, that such a mighty prince as themperour of Japon is, having once passed his word to the contrary, would not alter it now at the demand of such people as we are. And this is the best we can find now in Japon, and I dowbt wilbe every day worse then other.

(India Office, London.)

VIII.

BLAIR, EMMA HELEN, AND ROBERTSON, JAMES
ALEXANDER, THE PHILIPPINE ISLANDS
1493-1898.

CLEVELAND, 1903-1908.

VOL. XX. PP. 27-28.

NEWS FROM THE PROVINCE OF FILIPINAS,
THIS YEAR, 1621

(Extract)

This petition was not granted them; instead, decrees were issued in which the emperor ordered the governor of [Nan-] gasaqui to notify the tonos of Firando and other places that under pain of [*MS. torn*] they should allow no Japanese to embark with the Dutch and English. [*MS. torn*] It was observed and carried out even against the wishes of the heretics, who wished to assist [*MS. torn*] of them against us.

IX.

BLAIR, EMMA HELEN, AND ROBERTSON, JAMES
ALEXANDER, THE PHILIPPINE ISLAND
1493-1898.

CLEVELAND, 1903-1908.

VOL. XIX. PP. 58-59, 70.

RELATION OF EVENTS IN THE PHILIPINAS ISLANDS
AND NEIGHBORING PROVINCES AND KINGDOMS,
FROM JULY, 1619, TO JULY, 1620.

Of the Kingdom of Japon.

(Extract)

Passing from spiritual affairs to those temporal affairs of Japon that concern these islands, let me say that on the twelfth of July, 619, there arrived at Firando, a port of Japon designated for the trade of the Hollanders, four of their ships, which, as I informed you last year, have been off the coast of Manila. When our fleet prepared to sally out, the Dutch ships withdrew in good order, carrying with them a great many sick, beside the large number who had died from disease and from an infection which they say was given them in Bigan, a village on the coast of Manila. Since this is not known here, it must be their own imagination. Many of their people were drowned, also. In one ship which sank suddenly many people were drowned, among them a large number of Japanese, who were brought from Japon in the service of the Hollanders. These ships plundered nothing

volck noch geweer uytvoeren mogen, doch dat evenwel goede correspondentie ende vrientschap met sijn Magisteyt ende die van Japon begeeren te houden, ende dat om verder misverstant te schouwen, expres verboden hebben, datter niet meer soo veel schepen noch vloote in Firando vaeren, ende dat daer geen meer schepen sullen senden dan sijnne Magisteyt lieff ende aengenaem sy.

.....
VOL. I. p. 738.

[Generael Missive van Gouverneur Generaal J. P. Coen
ende Raed van Indie aen de Kamer Amsterdam.
Int 't fort Batavia, adi 6 September anno 1622.]

(*Extract*)

't Mandaet van de keyser van Japan wert soo streng onderhouden dat drie Japanders gecruyst zijn, omdat haer in de *Swaen*, om daermede hier te comen, verborgen hadden. De visitateurs zeven cleyne sabels in d' Engelse schepen vindende, lichten die daeruut, niettegenstaende dat die lange voor keyzers verbodt gehadt hadden. Tegen de Portugiesen hadden d' onse seecker proces over 't nemen van een fregat gewonnen. Van wegen de coninck van Siam sijn by de keyser van Japan seeckre ambassaten geweest, licentie versoeckende om volck te mogen uytvoeren, maer 't is haer geweygert.

VII.

LETTER FROM RICHARD COCKS TO SIR THOMAS
SMITH, GOVERNOR, AND THE COMMITTEES OF
THE EAST INDIA COMPANY IN LONDON.
HIRADO, SEPTEMBER 7, 1622.

(*Extract*)

Mr. Osterwick and my selfe, with 2 of the cheefe of the Hollandes factory, were at Edo after the departure of our shipp the last yeare, with presentes for themperour and his councill, hoping to have gott lycense to have carid out men and munition as in tyme past, but could get nothing but feare wordes for the space of 3 months we were forced to stay at Edo before we could gett our dispatch, they telling us in the end they could conclude nothing untill the arivall of the King of Firando, whome they had sent for, but at his coming they would take such order about that which we demanded, as also about the delivering the friggates goods, as should be to both our contentes. And, as we returned, we mett the King of Firando in the way, whoe made us many faire promisses. Yet now order is com from Edo that themperour will have all the priz goodes of the friggat for hym selfe, leving the rotten hull for us and the Hollanders, and, although we have made what resistance we could, yet are we constrayned to deliver it to them, will we or nill we; and, that which is more, they constrayne us to way over all the goodes to them, we being enformed they will make plito against us for much more matters then ever we receved and beleeve the lying reportes of our enemies whoe duble all. And for carying out men and munition

advyseeren, om weder licentie te becomen tot uytvoeren van Jappanders, ende sendt sooveele na Jacatra als doenlijcken is.

.....

VOL. III. p. 164.

[Brief van Gouverneur Generaal J. P. Coen aen den
Commandeur Willem Jansz..

Int 't fort Batavia, adi 9 April Anno 1622.]

(Extract)

Ons bedunckens schijnt apparent te wesen, dat d' Engelsen dit aenstaende Noordermoussen met alle haere vijff schepen van diffentie herwarts keeren sullen. Soo sy keeren, dient U. E. daertegen tenminsten met 3 ofte 2 goede schepen, die de commandeur Reyersz. best derven can, herwarts te comen, alsoo niet seecker sijn wat schepen van 't vaderlant te verwachten hebben; ende byaldien d' Engelsen resolveerden met haere vijff schepen, oft 't meerendeel, de tochten tegen den vyant op de custe van Manilha ofte China te continueeren, sullen de vrienden daertegen mede sooveel schepen als sy in een vloote onder een hoeft by haer vervoegen, den vyant te water alle mogelijke affbreuck doende, conform d' instructie ende ordre by den raet van diffentie alhier voor desen geraempt, sonder eenige lanttochten met haer te doen.

Soo U. E. dese, als niet en dencke, in Japan bequame, sult u van onsentwegen met alder discretie seer heuselijk aen den regent van Firando, ende andre groote heeren, doleeren, dat ons seer leet is verstaen te hebben, hoe de keyserlijke Magisteyt door toedoen van de Portugiesen verboden heeft, dat d' onse geen volck noch wapenen van oorloge uytvoeren, noch ons onse vyanden

in zee ontrent de landen van Japan niet beschadigen; dat in aller maniere gesint ende genegen sijn de vrientschap met sijnne Magisteyt te continueeren, ende dieshalven, om voordere misverstanden voor te comen, belast hebben, datter niet meer sooveel van onse schepen in Japan loopen, ende anders gene derwarts senden sullen dan sijnne Magisteyt lieff ende aengenaem is, doende ter gelegener tijt met soeticheyte na de voorgaende vryheyt trachten, sonder daeromme nochtants moeyte ofte instantie te doen; ende soo de vryheyt becomen condit, sal U. E. sooveele Japonders by de vloote van den commandeur Reyersz. ofte harwarts aenbrengen, als de gelegentheyte gedoocht, gelijk mede een goet getal goede Japansche sabels, alsoo seer qualick van hant-geweere versien sijn.

.....

VOL. III. pp. 165-166.

[Brief van Gouverneur Generaal J. P. Coen aen
Leonard Camps tot Firando.

Int 't fort Batavia, adi 9 April anno 1622.]

(Extract)

Met d' ordre die alrede gegeven hebben, hoopen onse saecken soo te schicken, dat Japan, soo 't soo wesen moet, met Godes hulpe wel sullen mogen derven; doch als het te passe comt, dient den heer van Firando, gelijk mede andre heeren meer ende daer 't voorder behoort, met aller beleeftheyt aen, dat ons leet is, dat sijn Magisteyt de Portugiesen soo grooten gunste bethoont, dat d' onse verboden heeft de Portugiesen (die onse oude vyanden sijn) in zee ontrent Japan niet te beschadigen, noch dat geen

sullen, welck oock niet wel passen soude; doch dewyl de Heeren sooveel gelt niet senden willen als nodich is, ende de Portugiesen ende Spangiaerden tot den handel gebruyckende zyn, maer haer selven liever in oncosten consumeeren, connen wy gans niet doen; in plaetse van gelt werden ons veel pampieren met schoone practiens van U: E: gesonden. Synder geleerden die met ver-
toogen, reecken, consecturen ende schoone discoersen, rycke retoeren weten te becomen ende alle aenstaende swaericheden voorcomen connen, stelt haer met den aldereersten in onse plaetse te werck, want wy daermede niet weten te verrichten.

Van Patani is hier wel aengecomen 't jacht de Gallias met een joncque nevens hem, geladen met peper ende eenige cleenicheden; dese peper is mede seer diere ingecocht. Van Siam hebben d'Eenhoorn met eenige andere retoeren dagelicx te verwachten. Alsoo de joncque de Hoope tot driemaal toe met een cargasoen van hertevellen incoops costende ontrent f 80000:—van Siam na Japan gedepesscheert ende t' elekens wederkeerde, is de tyt ondertusschen seer verlopen; Tholen in dese conjuncture daer comende, zyn de goederen daerinne gescheept ende is daermede den 16 Augusto na Japan vertrocken; den 15ⁿ October was daer noch niet vernomen, Godt geve dat te recht mach comen enz.

Int fort Batavia adi 20 December 1621.

U: Ed: dienstwilligen.

(geteekend)

J. P. Coen.

P. de Carpentier.

Willem van Antzen.

(Kol. Archief. 985. 's Rijksarchief.)

VI.

JAN PIETERSZ. COEN BESCHIEDEN OMTRENT ZIJN
BEDRIJF IN INDIË VERZAMELD DOOR
DR. H. T. COLENBRANDER.
'S-GRAVENHAGE. 1919-1923.

VOL. I. p. 636.

[Generael Missive van Gouv^e Gen^l J. P. Coen ende Raed van
Indie aen de Kamer Amsterdam. Int schip Nieuw
Hollandia voor 't fort Nassouw op 't eylandt
Nera in Banda, adi 6 Mayo anno 1621.]*

(Extract)

De Spangiaerden, Portugiesen, Chinesen ende andre handelaers hebben in Jappan soo veel te wege gebracht, dat ons ende d' Engelssen door den keyser verboden is, geen Jappanders ten oorloch uyt te voeren, alsoo het schijnt zynne majesteyt wijs maken, dat daermede den oorloch voeren. 't En sal ons niet wel passen ende is nodich dat U. E. jaerlijcx te meer volck senden.

VOL. III. p. 60.

[Brief van Gouv^e Gen^l J. P. Coen aen Leonard Camps tot
Firando over de Mollucques na Japan gesonden.
Int Casteel Amboyna, adi 11 Juny 1621.]

(Extract)

Doet oock neersticheyt, gelijk aen d' heer commandeur

* This title, omitted in the above Colenbrander compilation, is added since it appears in the original document.

gehoord is geweest, die in alles zoo veel t' onzen faveur gesproken heeft, als zyn staat, en qualiteit eenigzins mogt lyden.

Daarom zyn Excellentie, zedert zyne komst alhier, diverse maalen zoo hoog gerecommandeerd heeft, dat men alle naarstigheid doen zoude, om zoo goeden bewys voor de komst van de Heer van Nangasacki te bekomen, dat het volkomentlyk en waar blyken mogt, dat 'er onder de gevangene Portugeesen twee Paapen zyn, alzoo zy eens by 't contrarie verminderd zyn zouden. Dierhalven hoognoodig achte meer als tyd te zyn, de zaak by der hand te nemen; en te practiseeren zulke middelen tot voorschreeve bewys, dat onze gefundeerde pretensie ten goeden effecte gebracht werde, en de meede-gekomen Japanders, zoo veel mogelyk, ongequetst mogen blyven. Zoo UE. my daar mede beliefd te belasten, verhoope de zaak tot zulken einde te brengen, dat wy de Prinse behouden. De quade fame, die door 't nemen van 't zelve over ons daar van geloopen heeft, vernietigd, ende onze voor dezen vertoonde redenen voor waarachtig zullen geoordeeld werden, daar by ons crediet ende reputatie in 't Hof wederom niet weinig zal werden gestyfd.

Actum op 't Nederlands Comptoir tot Firando in Japan
dezen 20sten September A. 1621.

Onderstond,

Uwe Dienaar,
JACQUES SPECX.

V.

LETTER FROM JAN PIETERSZOOM COEN, THE GOVERNOR-
GENERAL AND THE COUNCIL OF THE NETHERLANDS
INDIA, TO THE DIRECTORS OF THE NETHERLANDS
EAST INDIA COMPANY. BATAVIA,
DECEMBER, 20, 1621.

Edele, Erntfeste, Wÿse, Voorsienige,

Seer Discrete Heeren.

Met de schepen enz.

Den 2ⁿ deser is hier van Firando wel aengecomen tship de Swaen, niet sonders dan rÿs met eenige andere waeren van cleenen valeur medebrengende. Wÿ hadden van daer wat anders verhoopt, dan 'tschÿnt dat altÿt te vroeck offte laet comen enz.

Vermits ons noÿt met treffelycke cargasoenen als vermaerde coopliden in Japan vertoont hebben, maer alleen met veel ledige schepen in Firando havenen ende onsen vÿandt van daer ver volgen, waerdoor veel Jappanders mede groote schade lyden, begint onse reputatie in Japan seer te verminderen. Niet dan voor zeerovers werden wÿ ende d'Engelsen aldaer vernaempt, door gestadich aenhouden van de Portugiesen by den Keyser, is ons ende d'Engelsen verboden niemant ontrent Japan (sonder diffenitie van limite) te beschadigen gelÿck mede geen volck, noch amonitie van oorloge wt te voeren. Alsoo geen gelt hebben om tegen de Portugiesen int Hoff van den Keyser te vereeren, is te duchten dat ons mede wel verboden soud mogen worden 't wttvoeren van rÿs ende 't havenen met d'oorlochscheppen in Japan, met precise ordre met wat ende hoeveel schepen daer comen

Schepen, ende Indische Oorlog noodig, ten vollen provideeren, werden wy door dit verbod weinig veragterd; doch om de consequentie, en om in onzen handel niet gelimiteerd te zyn, achten wy 't noodig van hier breeder versogt te werden: want na desen wel licht yser ende koper onder de Oorlogs-materiaalen te rekenen, en uit te voeren verbieden zullen.

De Hollanders, ofte Engelschen, zullen ontrent Japan op Zee niet rooven.

't Woord van rooven is in Japan schandelyk, ende heel different tusschen rooven van vyands schepen; derhalven wel te merken is onse proceduren by hen als roovers zyn aangediend, ende verstaan werden, gelyk naar myn opinie eenige vyanden ontrent Japan veroverende op de limite van 't Land van Japan zoo verre sullen geextendeerd en verstaan werden, na dat de Japansche Kooplieden daar by sullen geinteresseerd, ende de Portugeesen, of Spanjaarden in 't Hof gefavoriseerd zyn; derhalven naar myn opinie hier sonderling staat op te letten, en vertoonen, hoe verre 't recht, ende de jurisdictie van Princen in Zee is strekkende, soekende in alle manieren vaste limiten te verstaan, zonder ons by al te verre distinctie daar aan te binden. Zoo hier geen andre verklaring op werd gevorderd, zal 't voor onse stand alhier periculeus zyn, Portugeesche of Spaansche koopvaarders ontrent Japan te nemen.

Tot Nangasacki zullen, zoo die van 't groot schip, als andere schepen van buiten 's lands, hun handeling doen conform de ordre, die by tyden van Ongosiosamma daar in gesteld is, zonder iets te veranderen.

Dit raakt de Portugeesen, en andre vreemde scheepen, tot Nangasacki komende. Schryven in 't Hof eenige vryheeden op

't verkoopen van hun goederen, als anderzins, versogt te hebben, daar op hen lieden dit tot antwoord gegeven wierd, ende apparent in onzen, ende d'Engelschen respective ook consequentelyk werd gesteld, 't welk ons in geenigen deelen schadelyk, maar vorderlyk is, alzoo onse handeling en Koopmanschappen met geen meerder vryheit, als ten tyden van den overleden Keizer Ongoschio Samma, kunnen doen, derhalven hier op niet en valt te repliceren.

Op 't Schip, dat van de Kooplieden in Nangasacki by de Hollanders, ende Engelschen in Zee geroofd is, onderzocht zynde, zeggen, dat daar twee Paapen in geweest zyn, ende daarom 't zelve genomen hebben. Of 'er Paapen zyn, zult naauw onderzoek doen, ende hen laten weten.

Naar ik verstaan hebbe, komen de Tonno, ofte Heer van Firando, en zyn Majesteits faveur in Nangasacki van boven geauthoriseerd, om onderzoek te doen, of het Paapen zyn, of niet. Zoo het Paapen bevonden werden, zal 't Fregat, en de ingeladene goederen apparent ons blyven, ende per faute van goed bewind, ofte beleid contrarie by de voorschreeve Heeren verstaan werdende, is voor zeeker, wy boven de schade van restitutie gansch ons geloof, ende crediet, zoo by zyn Majesteit, en andre groote Heeren in 't Hof verliezen zullen, dat voortaan iets vertoonende, voor leugenachtig gehouden zal werden.

Ik hebbe voor de waarheit verstaan, dat de Hoogbootsman, of Schipper van 't genomen Fregat, voor zyn Keizerlyke Majts. principaalste Raad ontboden, geexamineerd, ende ten aanhooren van zyn Majt. zelve die in een andre kamer bedekt stond, is gedisputeerd geweest, daar den Heer alhier boven twee zyne principaalste Secretarissen ook by ontboden; ende mondeling op

dat ons jnt ministe niet en sullen vervoederen, eenich vaertuych 't sy Jappans, Chinees, ofte Portugiese fregatten, onder syne Mats. landt als zeeroovers aentenemen, noch jnt ministe te beschadigen. Dit hebben wy moeten belooven naete comen ende dient in alle manieren achtervolcht, soo wy gesint zyn in Jappan te blyven, dat sy dese saecke ernstich meynen blyckt hier aen, dat wy genoetsaecht syn geweest weder hondert piecken uyt de swaen te lichten, die voor cargasoen gescheept ende 't voorleden Jaer gecocht waeren, welke niet en wilden consenteeren vyt te vooren, wat excusen oock voort brachten.

(Kol. Archief. 987. 's Rijksarchief.)

IV.

FRANÇOIS VALENTIJN: OUD EN NIEUW OOST INDIËN.

AMSTERDAM & DOODRECHT, 1742-26.

V DEEL, 9^{DE} BOEK.

DERDE HOFTSTUK, Blz. 28-32.

Remonstrantie gedaan door de Heer Jacques Specx in Japan, aan den Heer Admiraal, Willem Janszoon.

...de naartvolgende translaat van de Artykelen die den Heere alhier van boven meede gebracht, ende ons naar vertooning der Copey ter hand gesteld heeft, besluiten zal, welke in 't korte naar de Japansche woorden overgezetz, ende de uitlegging, ofte meininge, neffens myne opinie daar by, gesteld zyn.

MEMORIE COPYE.

Werd verboden geen Japansche Natie, gehuurd, ofte gekogt, zonder pas van de Majesteit, met onze, of de Engelsche schepen, of Jonken, uit te voeren.

De meening van geen gek ofte mannen of vrouwen uit te voeren, verstaat zich, zoo ik onderrecht ben, en ons by den Hr. alhier generalyk aangezegd is, geen volk met onze, noch Engelsche schepen, of jonken, zyn Majesteits pas niet hebbende, gekoft, of gehuurd, uit Japan te voeren. Welk verbod, op groot aangeven van de Portugeesen, zoo 't voorleden jaar neffens onze gecommiteerden, als dit geheel jaar in 't Hof geweest zynde, gevolgd is, en, naar ik onderricht ben, niet zoo zeer tot faueur van de Portugeesen, als wel om hun volk in zoo grooten gevaar, gelyk de Portugeesen uitgaven, in vreemde Oorlogen niet te willen gepericliteerd hebben, is geschied.

Wy hebben den E. Heer Generaal per 't Schip Jams, en de Jonk Firando hier van, als per annex Extract, verwittigd, en zyne ordre daar op verzogt, die zyn E. aan den E. Heer Admiraal hier op gezonden, en gerecommandeerd heeft, dat men wederom licentie tot uitvoeren van de Japanders zou trachten te bekomen, zoo lang onze tegenwoordige oorlog op zoo veel diverse plaatsen continueeren, zal niemand twyffelen, of de Japanders zyn ons tot den zelve zoo dienstig, als eenige Natie van Indiën; derhalven met onze vorige vryheit, die wy in 't uitvoeren van de zelve gehad hebben, in alle manieren wederom moeten trachten te bekomen, dat in dese conjuncture met 't Schip Amsterdam wel te pas komen zoude, om met 't zelve eenige te zenden, en 't leger, dat in Amboina tegen het toekomende jaar vergadert werd, daar mede te versterken.

Geen korte sabels, korte of geen andre geweeren, ende oorlogsmateriaalen, zullen mogen uitgevoerd werden.

Wanneer de E. Heeren Meesters allerhande geweer, kruit, kogels, lonten, ende andre Oorlogsbehoefden voor onze Forten,

II.

DIARY OF RICHARD COCKS, CAPE-MERCHANT IN
THE ENGLISH FACTORY IN JAPAN. 1615-1622.

TOKYO. MDCCCXCIX. VOL. II.

PP. 325-326. APPENDIX.

Letter from Richard Cocks to the East India Company.
Hirado, September 30, 1621.*(Extract)*

Also may it please your Wors. to understand that, by meanes of the governor Nangasaque, Gonrok Dono, whoe taketh the Spaniardes and Portingals partes against us, with all the merchantes of that place, Miaco, and Edo, geving the Emperour to understand that both we and the Hollanders are pirates and theevs and live upon nothing but the spoile of the Chinas and others, which is the utter overthrow of the trade in Japon, noe one daring to com hither for feare of us. By which reportes themperour and his councill are much moved against us, as the King of Firando doth tell us, whoe is newly retorned from the Emperours court, where he hath married the Emperours kinswoaman, which hath brought hym into greate credit, and he is the only stay now which we have in Japon. And by his order the Hollandes capt., Leonard Camps, and my selfe are apointed to goe to Edo with the presentes to themperour and his councill, to procure redresse, yf we may, and prevent our enemies proceedinges. For the Emperour hath sent downe order that we shall carry out noe Japons to man our shiping, nether

make nor carry out any ordinance, gunpowder, shott, guns, pikes, *langanattes*, *cattans*, nor any other warlike munition. And it was reported we should carry out nether rise, bred, nor wine, nor flesh; but that is not yet donne. But the other is procleamed, and waiters apointed to look out night and day that noe forbidden matters be convoid aboard our shippes. Soe that, yf we get noe redresse for these matters, it is noe abiding for us in Japon, and better to know it at first then last what we may trust unto.

III.

LETTER FROM LEONARD CAMPS TO JAN PIETERSZOOM
COEN, GOVERNOR-GENERAL OF THE NETHERLANDS
INDIA. HIRADO, OCTOBER 15, 1621.*(Extract)*

De heere van Firando (die 3 a 4 maenden boven geweest is om de keyser reverentie te doen, gelyck in Jappan een gebruyck is ende alle heeren hoe machtich oock syn, jaerlycx doen moeten) den 8^m September om laech gecomen synde, heeft ons den 14^e volgende te hove ontboden, ende in eygen persoon voorgelesen 't verbot ende mandaet van syne keyserlyck Mat., waervan soo aen ons als d'Engelsszen in Jappanse taele copie gegeven heeft, den jnhout is dese dat in geenigerhande maniere eenige Jappanders met onse scheepen sullen uytvoeren 't sij mans, vrouwen, kinderen, slaven ofte gegochte persoonen, ten waere met Joncken daer niet als Jappanders op voeren ende de pas van Syne Mat. hadden, oock dat geenige Geweer, als sabels, Piecken, boogen, roers, geschut sullen uytvoeren, noch geenige amonitie van oorloge, mede

September 5 (*Sitinguach* 29).—I sent our *jurebasso* to Cochie to know wherefore the kinges *bongew* would not permitt our tymber and boardes to be landed at our howse, as also what he ment to take ij of our men presoners upon no occation. And he retorned me answer, he did not forbid the landing of our tymber, but only gave his men charge (per order from the king) to serch all the barks which came into Cochie, for to see whether they brought any armor, weapons, or munition (thinges defended per the Emperour), which might be brought in boates under tymber or boardes as well as otherwais. And tuching our two men, the one being charged with stealing of a knife, as he confesseth, but the Japans burthen hym with stealing of money, and the other for the bad handling of a woaman great with child, whereby she cast her child; “yet,” said he, “I make acco., yf yow speake but one word to Semi Dono, he will sett them free.”

September 11 (*Fatchinguach* 6).—And it should seeme the king being discontent because Capt. Speck stayeth not in Japon this yeare, for he sent to the Hollandes howse to seeke for pikes that were made ready to send for Jaccatra and weare carid aboard a shipp. But the king comanded they should be brought ashore againe, although Capt. Camps aledged they were bought the yeare past, before themperours edict came out; yet that would not serve, but they must be unladed againe.

September 12 (*Fatchinguach* 7).—One of the *Eliza*. men, called Gabrell, a plot maker, being drunk, fell overbord and was drowned.

The King sent Torazemon Dono and other ij of his noble men to tell me he was enformed that, at my being at Nangasaque, I had bought a greate quantety of gunpouder, to be secretly

conved aboard our shippes at Cochie, under culler of other matters. Unto which I answered, I had bought non, nether did ever speake word to any man about it, as befor God I did not. Soe it seemed they were content with my answer, and promised me to relate the truth to the king and to get Jacobe Dono, our boteswaine, released, he being banished, per order from the king, by the spitfull dealinges of the *bongews* at Cochie.

October 16 (*Conguach* 12).—...[They fownd] above 1000 pikes, *langenott*, and *cattans*, and brought them back, and would have staid the pilot; but the capt. more standes bound to answer for all which is taken.

November 23 (*Junguach* 20).—...And the *bongews* took 5 *cattans* from Mr. Sayer, 1 from Capt. Adams, and 1 from Capt. Cleavengar, and 1 from Mr. Mourton. Mr. Sayer hath had his above 5 yeares, and Capt. Adames brought his out of England, and Mr. Morton bought his in Sumatra at Janbee.

January 21 (*Shiwas* 20). [1622]—I went to Capt. Camps to take councell what we were best to doe about delivering our petition to the Emperours councell to have our oulde preveleges confermed to cary out men and munition our shippes in payment for it, as we have donne in tymes past. But Cacazemon Dono, Oyen Donos secretary, sent us word we were best to stay till the councell advized us to make knowne unto them yf we were greved in any thinge and we should be remedied, and then we might mak our case knowne; otherwais, yf we went about to doe it before that tyme, it would be throwne by, and noe respect had unto it. Soe we aledged we dowbted then we should be detayned here over long; but they promised the contrary.

	Page
VIII. Blair, Emma Helen, and Robertson, James Alexander, The Philippine Islands. Vol. XX. (<i>cf. Japanese Materials, 7 moon 27 day, Genna 7.</i>)	18
IX. Blair, Emma Helen, and Robertson, James Alexander, The Philippine Islands. Vol. XIX. (<i>cf. Japanese Materials, 7 moon 27 day, Genna 7.</i>).....	19
X. Diary of Richard Cocks. Vol. II. (<i>cf. Japanese Materials, 8 moon 12 day, Genna 7.</i>)	21
XI. Diary of Richard Cocks. Vol. II. (<i>cf. Japanese Materials, 9 moon 1 day, Genna 7.</i>)	23
XII. Diary of Richard Cocks. Vol. II. (<i>cf. Japanese Materials, 9 moon 24 day, Genna 7.</i>)	24

DAI NIPPON SHIRYO
(*Japanese Historical Materials*)

PART XII, VOLUME XXXVIII.

European Materials

I.

DIARY OF RICHARD COCKS, CAPE-MERCHANT IN
THE ENGLISH FACTORY IN JAPAN. 1615-1622.

TOKYO. MDCCCXCIX. VOL. II.

PP. 178, 191-192, 195-196, 209, 223-224, 238.

July 26 (Roquenguach 18). [1621]—...1 from Torazemon Dono, lardg, how that Emperour had comanded we nor Hollanders should carry no munition out of the cuntrey, nether any Japons in our shipp, and that much ill was reported to the Emperour and his councell against us and the Hollanders, as he could not write it per letter, but would relate it per word of mouth shortly at his arivall at Firando.

September 4 (Sitinguach 28).—We went to the king, being sent for, both the Hollanders and us, where he made known to us a writing sent from themperor and his Councell, that no stranger should buy any slaves, ether men or woamen, to send them out of the cuntrey, nether carry out any armor, *cattans*, lances, *langanantes*, poulder or shott, or guns; nether any Japon marrenars to goe in our shipping.

CONTENTS.

	Page
I. Diary of Richard Cocks. Vol. II. (<i>cf. Japanese Materials, 7 moon 27 day, Genna 7.</i>)	1
II. Diary of Richard Cocks. Vol. II. Appendix. Letter from Richard Cocks to the East India Company. Hirado, September 30, 1621. (<i>cf. Japanese Materials, 7 moon 27 day, Genna 7.</i>)	4
III. Letter from Leonard Camps to Jan Pieterszoon Coen, Governor-General of the Netherlands India. Hirado, October 15, 1621. (<i>cf. Japanese Materials, 7 moon 27 day, Genna 7.</i>).....	5
IV. François Valentijn: Oud en Nieuw Oost Indiën. V Deel, 9 ^{de} Boek. (<i>cf. Japanese Materials, 7 moon 27 day, Genna 7.</i>).....	6
V. Letter from Jan Pieterszoon Coen, the Governor-General and the Council of the Netherlands India, to the Directors of the Netherlands East India Company. Batavia, December 20, 1621. (<i>cf. Japanese Materials, 7 moon 27 day, Genna 7.</i>)	11
VI. Jan Pietersz. Coen bescheiden omtrent Zijn Bedrijf in Indië verzameld door Dr. H. T. Colenbrander. Vol. I, Vol. III. (<i>cf. Japanese Materials, 7 moon 27 day, Genna 7.</i>).....	13
VII. Letter from Richard Cocks to Sir Thomas Smith, Governor, and the Committees of the East India Company in London. Hirado, September 7, 1622. (<i>cf. Japanese Materials, 7 moon 27 day, Genna 7.</i>)	17

大日本史料 第十二編之三十八

昭和三十一年三月三十日發行

〔豫約價 八百圓〕

所	著
有	作

發	印	發	編
賣	刷	行	纂
所	者	者	者
	川	東	東
	瀨	京	京
	印	大	大
	刷	學	學
	株	史	史
	式	料	料
	會	編	編
	社	纂	纂
	東	所	所
	京		
	大		
	學		
	出		
	版		
	會		
	社		

製 コロタイプ印刷
本 株式會社 大塚巧藝社
株式會社 松岳社

振替口座東京五九九六四番
電話小石川(92)八一四番





